

授業科目名	生物学		担当者名	眞柳 みゆき			
			実務経験				
教科書	リハベーシック 生物学・生体防御学 【医歯薬出版】	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	リハ専門職に求められる生物学・生体防御学をわかりやすく説明していく。						
学習到達目標	生物学・生体防御学についての基礎知識を習得する。						
評価方法	出席・課題への取り組み・試験の結果を考慮して総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	なぜ生物学・生体防御学を学ぶのか？			生物学・生体防御学を学ぶ意義を知り。リハビリテーションへの活かし方を理解する			
2	リハビリテーションに活かす生物学・生体防御学						
3	細胞・染色体・遺伝子①			細胞の構造・機能・遺伝情報について理解する			
4	細胞・染色体・遺伝子②						
5	細胞の発生とネクロシス・アポトーシス①			ヒトの発生と分化について細胞レベルで理解する			
6	細胞の発生とネクロシス・アポトーシス②						
7	胚葉の発生組織と器官①			各胚葉からの組織・器官の発生について理解する			
8	胚葉の発生組織と器官②						
9	神経系・消化・代謝①			神経情報の伝達やエネルギー代謝について理解する			
10	神経系・消化・代謝②						
11	血液①			血液について理解する			
12	血液②						
13	内分泌①			内分泌器官・ホルモンについて理解する			
14	内分泌②						
15	復習			小テストを行い知識を整理する			
16	ウイルスと細菌①			ウイルスと細菌について学び、その違いと疾患について理解する			
17	ウイルスと細菌②						
18	生体防御と炎症①			生体防御機構と炎症について理解する			
19	生体防御と炎症②						
20	免疫①			免疫機構について理解する			
21	免疫②						
22	アレルギーと免疫異常①			アレルギーについて理解する			
23	アレルギーと免疫異常②						
24	個体の老化①			フレイル等、個体の老化について理解する			
25	個体の老化②						
26	感染症①			各種感染症について理解する			
27	感染症②						
28	院内感染対策①			予防接種等を含めた予防策及び感染症発生時対応法について学ぶ			
29	院内感染対策②						
30	復習			小テストを行い知識を整理する			

授業科目名	統計学		担当者名	松村一矢			
			実務経験				
教科書	解きながら学ぶ統計学 大川内隆朗 著	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
	基礎から学ぶ統計学 中原治 著	時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	記述統計を中心として統計の基礎知識を学ぶ。Excelを用いた演習も適宜行い、取得したデータに対し説明を可能とする基礎的な分析の一連を体験する。実際のデータが与えられた際、学んだ内容をもとに分析し説明する応用力を身につけることを目指す。						
学習到達目標	①統計の基礎的な用語を理解する、②データの特性に応じて利用可能な分析手法を理解する、③Excelなどを用い実際に基本的な分析結果を求めることができる、④実際のデータにおいて記述統計の観点から分析を行い、基本的なデータの特徴を説明できる。						
評価方法	出席・課題提出・試験						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	統計学とは			授業の説明を行う。統計の必要性を理解する			
2	母集団と標本			母集団と標本の意味と方法を理解する			
3	データの収集			データ収集における基本的なデータ構造、記録方法および尺度を理解する			
4				変数の理解、分析における交絡と表現方法について理解する			
5	クロス集計			クロス集計の意味と方法を理解する			
6				クロス集計を用いた調査の目的と方法を理解する			
7	度数分布とヒストグラム			度数分布の意味と方法を理解する			
8				ヒストグラムの意味と方法を理解する			
9							
10							
11	要約統計			数値要約の意味と方法を理解する			
12				四分位数の意味と方法を理解する			
13	箱ひげ図と幹葉図			五数要約の考え方と箱ひげ図の記述方法を理解する			
14				幹葉図の意味と方法を理解する			
15	分散			散布度および偏差の意味と方法を理解する			
16				母平均と母分散の意味と方法を理解する			
17	標準化			標準化の意味と方法を理解する			
18				偏差値の意味と方法を理解する			
19	相関			相関の意味および散布図による方法を理解する			
20				相関係数と回帰係数の意味と方法を理解する			
21	総合演習			調査目的に合わせ統計の実践を行う。実際の課題に対して記述統計を活用した解決方法を学ぶ。一連の分析を通じて、データの説明において記述統計で出来ること、出来ないことを明確にする。その上でさらなる統計手法を学ぶ意義を理解する。			
22							
23							
24							
25							
26							
27	まとめと振り返り			授業の内容を振り返り統計の目的と方法の理解を深める			
28							
29							
30	期末試験						

授業科目名	生活の化学		担当者名	熊谷美緒・眞柳みゆき			
			実務経験				
教科書	食と栄養を学ぶための化学 化学同人 適宜、配布資料(プリント) 使用	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	暮らしに最も身近で、最も欠かせない「化学」について、解説する。						
学習到達目標	生活を化学的現象から考えられる力・利用する力をつける。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	私たちの毎日を支えている化学について			生活と化学の関わりや化学の概要について理解する			
2	化学を学ぶ意義						
3	物質とは			物質について学び理解する			
4	原子の構造と化学結合						
5	水の化学①			水の特異性について化学的側面から理解する			
6	水の化学②						
7	物質の三態について			物質の三態を知る			
8	酸と塩基①			酸と塩基について理解する			
9	酸と塩基②						
10	酸と塩基③						
11	生活の化学 応用編①			生活に応用されている化学現象を学ぶ			
12							
13	ミネラル①			ミネラルについてその役割も含めて理解する			
14	ミネラル②						
15	有機化学①			有機化学について学ぶ			
16	有機化学②						
17	有機化学③						
18	有機化学④						
19	生活の化学 応用編②			生活に応用されている化学現象を学ぶ			
20							
21	炭水化物①			炭水化物について理解する			
22	炭水化物②						
23	脂質①			脂質について理解する			
24	脂質②						
25	アミノ酸とタンパク質①			アミノ酸とタンパク質の関連性も含めて両物質を理解する			
26	アミノ酸とタンパク質②						
27	有機化合物①			有機化合物について、生活に応用されているものを 知り理解する			
28	有機化合物②						
29	生活の化学 応用編③			生活に応用されている化学現象を学ぶ			
30							

授業科目名	情報処理		担当者名	熊谷美緒			
			実務経験				
教科書	教科書指定なし 配布資料(プリント)使用	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	Microsoft Windows を使用して、ファイルの管理、文書作成、発表資料の作成等、基本的なPC操作を学ぶ。						
学習到達目標	授業や臨床実習の課題提出や文書作成等、必要なスキルを身につける。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	情報の取扱いについて			情報を扱う上でのモラルとマナーを理解する。			
2							
3	検索			適切な情報を得るための検索ができる。			
4							
5	情報の管理			フォルダ管理ができる。			
6	Wordを使用した文書			ビジネス文書を作成できる			
7							
8	Wordを使用した図形・画像			図形や画像を挿入し、表を作成できる。			
9							
10	Wordを使用した各種表現			ビジネス文書のレイアウト作成ができる。			
11							
12	Wordを使用した課題～案内作成～			与えられた課題を時間内に作成できる。			
13							
14	Excelを使用した表作成			タイムテーブル・スケジュールが作成できる。			
15							
16	Excelを使用したデータ管理			入力したデータを目的に応じて検索・並べ替え・関数ができる。			
17							
18	Excelを使用した課題～評価表作成～			与えられた課題を時間内に作成できる。			
19							
20	臨床実習模擬症例レジメ作成			臨床実習レポートを作成できる。			
21							
22	Powerpointを使用した言語聴覚療法の説明			言語聴覚療法に関して学んだことを、PowerPointで画像・図・表等をしようまとめることができる。			
23							
24							
25							
26							
27							
28	班ごとに発表			与えられた課題を時間内に作成し、発表する。			
29							
30							

授業科目名	現代表現		担当者名	町田洋介			
			実務経験				
教科書	なし	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	日本語における表記の仕方や文章構成について学び、基本的な文章の作成について習得する。さまざまな様式の文章を知り、その正しい表現の仕方・書き方を身に付ける。						
学習到達目標	文章作成における基礎を習得したうえで、論理的説得力のある文章を作成する力を身に付ける。						
評価方法	授業内課題および筆記試験による						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	日本語表記の基礎(1) 文法			文章作成にあたり必要な国語文法の基礎を身に付ける			
2							
3	日本語表記の基礎(2) 原稿用紙の書き方・文体						
4							
5	日本語表記の基礎(3) 記号の使い方・句読点の打ち方						
6							
7	日本語表記の基礎(4) 漢字表記とひらがな表記・表記ゆれ						
8							
9	日本語表現の基礎(1) 段落構成			段落構成の基本と段落を分ける意味を知り、段落構成を意識した文章を書ける			
10							
11	日本語表現の基礎(2) 対比関係のある文章①			文章の構造を捉えながら、情報を整理して読み取ることができる 構造を意識した文章を書ける			
12							
13	日本語表現の基礎(3) 対比関係のある文章②						
14							
15	日本語表現の基礎(4) 言い換え表現①			言い換える前の表現と後の表現を正しく把握できる さまざまな事物、表現の具体化・抽象化ができる			
16							
17	日本語表現の基礎(5) 言い換え表現②						
18							
19	日本語表現の基礎(6) 因果関係のある文章①			根拠や原因を正しく読み取ることができる 因果関係の明確な文章を書ける			
20							
21	日本語表現の基礎(7) 因果関係のある文章②						
22							
23	日本語表現の基礎(8) 敬語			場に応じた敬語表現を身に付ける			
24							
25	手紙の作成			定型的な文書を作成する力を身に付ける			
26							
27	メールの作成						
28							
29	その他の文書の作成						
30							

授業科目名	保健体育		担当者名	沼田 尚			
			実務経験				
教科書	なし	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	演習
		30					
授業概要	本授業では、様々な運動を体験することで、実践することの「楽しさ」を理解し、必要な基礎的運動技術を獲得することを目的とし、生涯、スポーツへと関わっていくための運動習慣やコミュニケーション能力の習得、養成、向上を図る。						
学習到達目標	① 怪我をしないようにみんなで楽しみながら、様々な運動を積極的に体験し、基礎的運動技術を獲得・向上させる。 ② 様々なスポーツのルールを理解する。 ③ 体づくり運動を行うなかで、自己の柔軟性や身体の動きを理解する。 ④ スポーツを通して、コミュニケーション能力を習得、養成、向上する。						
評価方法	・ 受講態度(80%)…出席状況と授業への取り組む姿勢・態度など。 ・ 技術習得と理解度(20%)…各種目における、技術の習得とルールの理解度などをみる。 実技試験を行う場合もある。 ・ 課題レポート…適宜レポートの提出を求めることもある。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	オリエンテーション			授業への取り組む姿勢・態度に気を付ける			
2	ストレッチ運動			体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する			
3	身体づくり運動1(自重トレーニング)			体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する			
4	身体づくり運動2(自重トレーニング)						
5	身体づくり運動3(持久カトレーニング)			体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する			
6	身体づくり運動4(持久カトレーニング)						
7	身体づくり運動5(ペアトレーニング)			体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する			
8	身体づくり運動6(ペアトレーニング)						
9	身体づくり運動7(サーキットトレーニング)			体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する			
10	身体づくり運動8(サーキットトレーニング)						
11	縄を使った運動1			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
12	縄を使った運動2						
13	道具を使ったスポーツ1(フライングディスク)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
14	道具を使ったスポーツ2(フライングディスク)						
15	道具を使ったスポーツ3(ドッジビー)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
16	道具を使ったスポーツ4(ドッジビー)						
17	道具を使ったスポーツ5(インディアカ)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
18	道具を使ったスポーツ6(インディアカ)						
19	道具を使ったスポーツ7(インディアカ)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
20	道具を使ったスポーツ8(インディアカ)						
21	道具を使ったスポーツ9(ソフトバレーボール)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
22	道具を使ったスポーツ10(ソフトバレーボール)						
23	道具を使ったスポーツ11(ソフトバレーボール)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
24	道具を使ったスポーツ12(ソフトバレーボール)						
25	道具を使ったスポーツ13(シッティングバレーボール)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
26	道具を使ったスポーツ14(シッティングバレーボール)						
27	道具を使ったスポーツ15(ブラインドサッカー)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
28	道具を使ったスポーツ16(ブラインドサッカー)						
29	道具を使ったスポーツ17(ブラインドサッカー)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
30	道具を使ったスポーツ18(ブラインドサッカー) まとめ						

授業科目名	教育学		担当者名	町田洋介			
			実務経験				
教科書	『アクティベート教育学01教育原理』ミネルヴァ書房	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	教育の定義とその意義について理解し、現代の教育に連なる教育思想および教育制度の歴史についての知識を得る。また、学校教育を中心とする現代教育の諸課題について理解する。						
学習到達目標	教育についての広義の意義目的を理解し、教育思想および教育制度の歴史を学ぶことにより、学校教育の諸制度・諸実践についての理解を深める。						
評価方法	レポートおよび筆記試験による						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	教育とは何か			教育として行われるさまざまな活動を知り、教育について理解する。			
2							
3	生活と教育			家庭教育、社会教育について理解する。			
4							
5	公教育の在り様			学校教育を中心に公教育の歴史を知り、公教育の在り方について理解する。			
6							
7	西洋教育思想の歴史(1) 古代			古代ギリシア哲学における知への欲求を学び、教育の源流に関する知識を得る。			
8							
9	西洋教育思想の歴史(2) 中世			中世からルネサンス期におけるヨーロッパのキリスト教を基盤とした教育観・人間観について理解する。			
10							
11	西洋教育思想の歴史(3) 近代			今日の教育観の基盤を成す近代教育思想について理解する。			
12							
13	西洋教育思想の歴史(4) 現代			新教育の理念と実践について理解する。			
14							
15	学校教育の歴史			近代における学校の誕生と展開についての知識を得る。			
16							
17	日本における教育の歴史(1) 近代以前			江戸時代までの子ども観、教育観について理解する。			
18							
19	日本における教育の歴史(2) 近代			明治期に整備された学校教育制度と、新教育および戦争の影響について理解する。			
20							
21	日本における教育の歴史(3) 現代			戦後の学校教育制度とその展開について理解する。			
22							
23	西洋における教育実践			新教育運動の実践についての知識を得る。			
24							
25	日本における教育実践			日本における新教育運動と、生活綴方についての知識を得る。			
26							
27	学力とは何か			教育で育む資質・能力について理解する。			
28							
29	教育における現代的課題			情報化社会における学校教育の諸課題について理解する。			
30							

授業科目名	心理学		担当者名	島田真須美			
			実務経験	公認心理師として診療所等での勤務経験あり			
教科書	心理学・臨床心理学 第2版 内山靖・藤井浩美・ 立石雅子 編 医歯薬出版株式 会社	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	リハビリテーション専門職は、人との関わりが多い職種であるため、心理学の知識が活かされる事があると思われる。 リハビリテーションの視点を持ちながら心理学の基礎的な知識について詳述する。						
学習到達 目標	リハビリテーション専門職として心理学を学ぶ意義を知り、リハビリテーションに活かす心理学の基礎的な知識を修得する。						
評価方法	出席、授業態度、期末試験から総合的に評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	心理学とは			心理学の基本概念について説明できる 教科書 第1章			
2							
3	心理学の誕生と発展			心理学の誕生と発展について説明できる 教科書 第2章			
4							
5	感覚・知覚・注意・認知			感覚・知覚・注意・認知について説明できる 教科書 第3章			
6							
7	情動・動機付け・パーソナリティ・社会			情動・動機付け・パーソナリティ・社会について説明 できる 教科書 第4章			
8							
9	記憶・学習			記憶・学習について説明できる 教科書 第5章			
10							
11	言語・概念・思考			言語・概念・思考について説明できる 教科書 第6章			
12							
13	発達と知能			発達と知能について説明できる 教科書 第7章			
14							
15	臨床心理学とは			臨床心理学について説明できる 教科書 第8章			
16							
17	防衛機制			防衛機制について説明できる 教科書 第9章			
18							
19	心理アセスメント			心理アセスメントについて説明できる 教科書 第10章			
20							
21	臨床で用いられる心理検査			臨床で用いられる心理検査について説明できる 教科書 第11章			
22							
23	臨床心理学の介入方法(行動的)			臨床心理学の介入方法(行動的)について説明でき る 教科書 第12章			
24							
25	臨床心理学の介入方法(内面的)			臨床心理学の介入方法(内面的)について説明でき る 教科書 第13章			
26							
27	臨床心理学の介入方法(相談的)			臨床心理学の介入方法(相談的)について説明でき る 教科書 第14章			
28							
29	心理学・臨床心理学まとめ			心理学・臨床心理学の基礎的な知識について説明で きる			
30							

授業科目名	英語		担当者名	都築 玲子			
			実務経験				
教科書	指定しない プリント小冊子を使用する	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	医療、科学、環境等の分野についてのニューストピックや、DVDを使用し知見を広めながら、医療実務で役立つ基礎英語力を養成する。						
学習到達目標	英文の基本構造をとらえられるようになり、文、段落、文全体を理解し、必要な情報を得られるように基礎力を身につける。						
評価方法	出席、クラス参加、課題提出、小テスト、期末試験の結果の総合評価とする。						
時数	授 業 内 容			学習課題・留意事項など			
1	自己紹介・クラス予定・評価方法 Icebreaking game			クラスルールと、自己紹介、今後の英語学習のためのコツ、前期授業評価基準について理解する。			
2	TOEIC Bridge Sample Test 自己評価			現在の英語力を評価し、各自半年後の目標を確認する。			
3	Comparing COVID-19 with previous pandemics			紀元前から現代まで、人類に幾度か危機をもたらしたパンデミックとCOVID 19を比較し、違いと教訓を学ぶ。			
4	After effects of COVID 19, 次のパンデミックに備える			DVD Are we ready for a pandemic? Bill Gates			
5	1. New Measles Outbreak in Europe			読解Rule1 文章の主語、動詞、目的語、補語など文の構造を理解できる。			
6	2. Outbreak of Plague in Madagascar			マダガスカルで流行した病気について理解できる。			
7	3. New Blood Test may detect cancer			読解Rule 2 代名詞が何を示すか説明できる。			
8	消化器系の臓器の英語表現をまとめる			癌を察知できる新しい血液検査はどのようなものか理解する。			
9	4. Baby Girl Born From Embryo Frozen 24 Years Age			読解Rule 3 言い換え表現を見つけられる。			
10	4. Baby Girl Born From Embryo Frozen 24 Years Age			24年前に凍結された受精卵から女の子が生まれた経過について説明できる。生殖医療の問題点がりがいできる。			
11	5. Regular Exercise Can Improve Your Memory			読解Rule 4 地名、団体名、役職名などはまとめて読みやすくすることができる。			
12	5. Regular Exercise Can Improve Your Memory			記憶力、思考力に運動がどのような影響を与えるか説明できる。			
13	6. Moderate Coffee Consumption May Keep You Healthy			適当なコーヒーの消費がある種の病気の予防に役立つことが理解できる。			
14	6. Moderate Coffee Consumption May Keep You Healthy			コーヒーの効用とは何か理解する。			

15	7..Dog Ownership May Improve Your health	犬との生活が人の健康に及ぼす影響について説明できる。
16	7. Dog Ownership May Improve Your health	どのような病気に効果的であるか説明できる。
17	8. American Cardiologists Publish New Blood Pressure Guidelines	読解Rule 5 英文の構造をつかめる。
18	8. American Cardiologists Publish New Blood Pressure Guidelines	血圧の基準値が変わった理由と高血圧の影響について説明できる。
19	9. Cloning of First Monkeys in China	類人猿ではむずかしいとされることを可能にしたのはどのような技術か理解できる。
20	9. Cloning of First Monkeys in China	サルたちのその後と、その後の問題について理解できる。
21	Rehabilitation for stroke: What to know	脳卒中のリハビリテーションについてどのような職域連携が必要か理解する。
22	Rehabilitation for stroke: What to know	脳卒中が引き起こす障害とは何か。汰職域連携の例として読解する
23	10.Stephan Hawking dies at 76	ホーキング博士の功績について理解できる。
24	10. Stephan Hawking dies at 76	ALSとはどのような病気か理解できる。
25	10. Predictions of Dr. Hawking	ホーキング博士の12の未来予言を読解する。
26	There are no scraps of men	アフガニスタンで働き、神の使いとよばれるイタリア人理学療法士の奮闘について理解する。
27	Tribute to Tetsu Nakamura a humanitarian more than a doctor	中村哲氏がなぜアフガニスタンの地で働いたか目指したものを理解する。
28	Tribute to Tetsu Nakamura a humanitarian more than a doctor	Tribute movie
29	小テスト	vocabulary, Reading, composition
30	Review	総復習

授業科目名	コミュニケーション論		担当者名	小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	コミュニケーション論・多職種連携論(医歯薬出版)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚士がリハビリテーションを実施する際に、まずリハ専門職として対象者とその家族とのコミュニケーションを円滑にすることは必須である。この授業では、対象者と家族、リハビリに関わる多職種の方々とのコミュニケーションを成立させるスキルをみがくための知識や技能を学ぶ。また、AACについて種類・方法・実際について学ぶ。						
学習到達目標	コミュニケーションの本質を理解し、人に伝えるとはどういうことか？コミュニケーションの手法を学びながら、対象者との面接、家族への伝え方、多職種との連携に必要な知識と応用力を身に着ける。						
評価方法	出席率、授業態度、定期試験による評価。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	この授業の目的とコミュニケーションとは？			コミュニケーションとは何かを説明できる。			
2							
3	コミュニケーションの基本的な考え方			コミュニケーションの目的を学ぶ。			
4							
5	傾聴する力と説得する力			傾聴するための準備			
6				傾聴して共感する(グループ・ワーク)			
7	言語によるコミュニケーション			ことばの働きについて説明できる。(グループワーク)			
8							
9	ことば以外のコミュニケーション～感情の表現			ノンバーバル・コミュニケーションの重要性(グループ・ワーク)			
10							
11	コミュニケーションの手法			「開かれた質問」と「閉ざされた質問」を体験する(グループ・ワーク)			
12							
13	AACとは何か？			AACの意義、手法を理解し、説明できる。			
14							
15	AACの種類について(ローテク)			手作りのAACについて理解する。			
16	AACの種類について(ハイテク)			AACに役立つハイテク機器			
17	AACの実際と機器の操作と効果			各種機器の操作方法を説明できる。			
18				これからのAACについて(グループワーク)			
19	リーダーシップとメンバーシップ			リーダーに求められる資質を理解し、対してチームを構成するメンバーに求められることも説明できる。			
20							
21	多職種連携とチーム医療～他職種の理解と会話			他職種について説明できる。			
22				多職種連携の重要性を理解する。			
23	リーダーシップとメンバーシップ			リーダーに求められる役割、資質を理解する。			
24				メンバーの役割とリーダーとの関わり方について理解し説明できる。			
25	チームアプローチの基本構造			PDCAサイクルについて理解し、説明できる。			
26							
27	チームアプローチの実際とSTの立ち位置			地域包括ケアシステムにおけるSTの役割を理解し、説明できる。			
28							
29	コミュニケーションについて新たに学んだことを発表する回			コミュニケーションとは何か、グループで考えたことをまとめて発表し合う。			
30							

授業科目名	医療倫理		担当者名	尾形由美子			
			実務経験	看護師として病院等での勤務経験あり			
教科書	医療概論(第4版)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	医療倫理の歴史、基本概念を理解し、医療現場で遭遇する倫理問題に対処できる言語聴覚士としての基礎的能力を養う						
学習到達目標	①医療倫理の基礎知識を身につける。 ②医療倫理の問題や考え方を自分でも用いることができるようになる。						
評価方法	グループワーク、ディスカッション、ディベートなど平常点30%、学期末試験70%						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	ガイダンス 医療と倫理との関わり			なぜ医療倫理を学ぶのかを理解できる。 人道主義・人権について考える。			
2							
3	「医の倫理」小史 i 古代から近代への変遷			倫理規範の歴史を知ることができる。			
4							
5	「医の倫理」小史 ii リハビリテーションの変遷と今後の課題			医の倫理とリハビリテーションとの関連が理解できる。			
6							
7	「言語聴覚士」小史 iii 言語聴覚士の役割			言語聴覚士の役割が理解できる。			
8							
9	医療倫理学的問題 インフォームドコンセント			診療行為を正当なものとするための有効な同意であることを理解できる。			
10							
11	医療倫理学的問題 医療従事者の基本的義務			人命の尊重と患者への献身とはなにか理解することができる。			
12							
13	医療倫理学的問題 医療倫理の4原則			善行の原則と無危害の原則、自立尊重の原則、正義の原則が説明できるようになる。			
14							
15	医療倫理学的問題 医療倫理の4原則(事例から)			医療におけるモラルジレンマ、生命倫理の4原則を考える。			
16							
17	医療倫理学的問題 患者の権利を尊重する			人間の尊厳について考える。			
18							
19	医療倫理学的問題 生命の始まりに関わる倫理的問題			人工妊娠中絶、生命の選別、人工受精、体外受精について現状を知る。			
20							
21	医療倫理学的問題 生命の終りに関わる問題			終末期医療、尊厳死と安楽死について学ぶ。			
22							
23	医療倫理学的問題 臓器移植から再生医療			脳死、臓器移植、遺伝医療、再生医療をめぐる問題について学ぶ。			
24							
25	医療をめぐる状況 医療倫理から考える医療事故・医療安全			医療行為における過失、過誤について理解できる。 医療事故を防止する取り組みを知る。			
26							
27	医療をめぐる状況 医療倫理から考えるwell-beingを高める支援			マズローの5段階の基本的欲求を理解し、幸福・健康を高めるために必要なものとは何か説明できるようになる。			
28							
29	医療をめぐる状況 医療倫理から考える科学的根拠とこれからの医療			EBMとは何か、医療職は一生勉強していかねばならないことを理解する。			
30							

授業科目名	医学概論		担当者名	及川 隆司			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	学生のための医学概論 (医学書院)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	我が国の医療体制の概念や考え方を解説する。また現在の我が国をとりまく医学全体について多岐にわたって講義する。						
学習到達目標	医療体制の概念や考え方を身に付ける						
評価方法	定期試験による						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	チーム医療・医療保険提供体制を理解する			医療を支える人々で保健医療サービスの提供体制、日本の医療保険制度、医療政策と医療計画・医療と経済			
2	医療保険制度・医療改革・医療と経済を理解する						
3	在宅ケアのシステム等を理解する			在宅ケアの推進 高齢者ケアシステムについて理解する			
4	高齢者ケアシステムを理解する						
5	災害医療の定義・種類			災害医療について理解する			
6	災害医療の実践-CSCATTT						
7	救急医療の歴史			救急医療の歴史と日本の現状について理解する 救急救命について理解する			
8	わが国の救急医療体制						
9	医療事故の定義と原因			医療安全について理解する			
10	医療事故の対策						
11	健康の定義・健康政策			健康の定義・ヘルスプロモーション オーダーメイドの健康増進法について理解する			
12	オーダーメイドの健康増進・倫理規定						
13	老化・認知症の定義と対策			老化・認知症とその対策 思春・青年・成人期の精神保健と対策について理解する			
14	精神保健対策と将来						
15	リハビリテーションの目的とチームワーク			リハビリテーションの目的とチームワーク ノーマライゼーションへの道			
16	ノーマライゼーションへの道と課題						
17	細菌と人間の戦いにみる医学の歴史			近代医学の誕生 日本の近代化と医療の発達について理解する			
18	母子の健康をめぐる日本の医療の発達						
19	放射線被爆と人間			薬害・公害事例から学ぶこと			
20	薬害・四大公害病から学ぶもの						
21	診断・治療機器の発達と課題			医用工学の発達 臓器移植の定義と施行について理解する			
22	臓器移植法の歴史とシステム						
23	遺伝子診断の課題と今後の医療従事者の役割			生命科学の発達と医学 海外での保健医療活動			
24	保健医療分野の国際化						
25	保管代替医療の内容			現代医療の新たな領域について理解する 予防等の基礎について理解する			
26	統合医療と食。日本における統合医療						
27	患者中心の医療・医療サービスと医学診断			現代医療が目指すもの 医療と診療記録			
28	POS診療記録が目指すもの						
29	チーム医療の実践。生命倫理とその判断			患者中心の医療の方法論 生命倫理と患者の権利			
30	インフォームドコンセント・個人情報保護とターミナルケア						

授業科目名	解剖学		担当者名	眞柳 みゆき			
			実務経験	歯科医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	言語聴覚士テキスト/医歯薬出版 発生発語 摂食嚥下の解剖生理学/メジカルビュー社 脳の事典/成美堂書店 プリント	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚士にとって重要な部分を中心に、人体の仕組みや各器官のはたらきに関して、なるべくわかりやすく解説していく。						
学習到達目標	人体の構造・しくみについての知識を習得する。						
評価方法	出席・課題への取り組み・試験の結果を考慮して総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	からだの構造と機能の基本①			ヒトとは？人体の階層性を説明できる			
2	からだの構造と機能の基本②			解剖学的な基本用語を理解する			
3	骨格・骨の構造			骨格系の働きや骨の構造を理解する			
4	骨の連結・体幹の骨			関節・体幹の骨について理解する			
5	頭蓋			頭蓋を形成している骨を知る			
6	筋肉の種類と働き			筋肉について理解する			
7	骨格筋①体幹・上肢・下肢の筋						
8	骨格筋②頭頸部の筋						
9	循環器系			各系に属する器官とその機能・構造について理解する			
10	血液と免疫系・確認問題(p85)						
11	消化器系						
12	泌尿器系						
13	生殖器系						
14	生殖器系・内分泌系①						
15	内分泌系②						
16	感覚器系①						
17	感覚器系②						
18	神経系①						
19	神経系②						
20	神経系③						
21	小テスト						
22	発生発語・摂食嚥下とは？ かかわる器官① 口腔			発生発語・摂食嚥下にかかわる器官とその構造・機能を理解する			
23	発生発語・摂食嚥下にかかわる器官② 鼻腔・咽頭						
24	発生発語・摂食嚥下にかかわる器官③ 喉頭						
25	発生発語・摂食嚥下にかかわる器官④ 呼吸器						
26	発生発語機能・鼻咽腔閉鎖不全			発生発語の機能・かかわる神経について理解を深める			
27	発生発語の神経基盤						
28	摂食嚥下機能			摂食嚥下機能及びかかわる神経について理解を深める			
29	摂食嚥下の神経機構						
30	復習・小テスト			小テスト解答解説を聞き理解を深める			

授業科目名	生理学		担当者名	高橋彌穂			
			実務経験				
教科書	・シンプル生理学／南江堂 ・目でみるからだのメカニズム ・PT・OT生理学ノート	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚士も人の身体の基本的な構造と機能を学ばなければならない。そのうえで、生命維持活動のために必要な神経系のはたらきは下界・身体内の変化を刺激としてとらえ、呼吸・循環などを調節している。この授業では細胞の基本構造・はたらきから、中枢・末梢神経系、感覚器系、循環系(心臓・血管、血液)の機能とはたらきについて学び、専門科目へつなげる。						
学習到達目標	①細胞の構造と機能について説明できる。②神経系のシナプス伝達、神経伝達物質について理解する。③中枢神経、末梢神経系の概略と関係を理解する。④感覚器系の機能について理解する。⑤血液循環の仕組みについて理解する。						
評価方法	出席・授業態度・前期試験(9月予定)						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	生理学とは？ 身体の階層性について			医療になぜ生理学が必要か？生理学と生物学の違い。人体には様々な階層が存在するということなどを学ぶ。			
2	生命現象について ホメオスタシス			生体恒常性の仕組みを学ぶ。			
3	細胞の基本構造と機能:細胞膜の機能と構造			細胞膜の機能を学ぶ。			
4	細胞の基本構造と機能:核 DNAとRNA			核の中にあるDNAとRNAの働きを学ぶ。			
5	細胞の基本構造と機能:細胞小器官			細胞質の中の様々な構造物を知る。			
6	細胞の基本構造と機能:細胞小器官			タンパク質合成について学ぶ。			
7	細胞の基本構造と機能:静止電位			静止電位の意味を知る。			
8	細胞の基本構造と機能:活動電位			活動電位の意味を知る。			
9	神経細胞の構造			神経細胞の各部位について学ぶ。			
10	神経興奮の発生と伝導			興奮の発生の機序について学ぶ。			
11	末梢神経の種類			末梢神経の種類と働きを知る。			
12	末梢神経の種類			末梢神経の種類と働きを知る。			
13	神経の興奮と伝達① シナプス 活動電位			シナプスの構造について学ぶ。			
14	神経の興奮と伝達② 神経伝達物質			興奮性と抑制性シナプスの特徴と神経伝達物質の種類を知る。			
15	中枢神経系① 総論(大脳から脊髄)			大脳から脊髄までの中枢神経系の機能について学ぶ。			
16	中枢神経系② 大脳 大脳皮質			大脳皮質の活動と役割を知る。			
17	中枢神経系③ 脳幹 間脳			脳幹の機能と反射中枢としての役割を知る。			
18	中枢神経系④ 脳波 覚醒と睡眠			覚醒と睡眠について性質と睡眠の役割を知る。			
19	中枢神経系⑤ 小脳 脊髄			小脳の機能について学ぶ。			
20	中枢神経系⑥ 小脳 脊髄			脊髄神経と反射の関係			
21	感覚器系①感覚器官のはたらき 意識 閾値 順応性			適刺激と閾値について説明できる。			
22	感覚器系② 体性感覚 皮膚感覚 深部感覚			体性感覚についてそれぞれ説明できる。			
23	感覚器系③ 内臓感覚			内臓感覚について学ぶ。			
24	感覚器系④ 視覚			視覚の伝導路について学ぶ。			
25	感覚器系⑤ 聴覚 平衡感覚			音波の伝わる経路について説明できる。			
26	感覚器系⑥ 嗅覚 味覚			嗅覚と味覚について学ぶ。			
27	循環系① 心臓のはたらき 肺循環と体循環			心臓の働きと循環について学ぶ。			
28	循環系② 心臓の興奮と刺激伝導			心臓の自動性について学ぶ。			
29	血液のはたらきと成分			血液の組成と機能について学ぶ。			
30	ホルモンの種類とはたらき			ホルモンの作用と性質を学ぶ。			

授業科目名	病理学		担当者名	武田 和久			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	・カラーアトラス病態病理学 長澤治夫／鈴木博義 共著 改訂2版 (株)丸善出版 ・配布資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	ヒトのからだの正常な機能と構造が、さまざまな原因(病因)により異常となる仕組み、機序について学習し、それぞれの病態と正常な構造と機能との違いについて学習する。また、からだの損傷や創傷の回復や治癒の機序についても学習する。						
学習到達目標	[1]疾病の成立機序や疾病の基本となる病変とそれに伴う形態・機能の変化、病態生理学、病態生化学について説明できる。 [2]からだの損傷や創傷の回復や治癒の機序についても理解し説明できる。 [3]それぞれの病態と正常な構造と機能との違いについて理解し説明できる。						
評価方法	出席・授業態度・試験(1月)の結果を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	正常な細胞の構造(オルガネラ)と機能			正常な細胞のオルガネラの構造・機能とその異常疾患について説明できる。			
2							
3	細胞障害の原因と機序(変性)			細胞障害の原因と機序(変性)を分類し各々について説明できる。			
4							
5	細胞の死 及び 病理的变化(細胞増殖分化の異常)			細胞死(壊死、アポトーシス)及び病理的变化(細胞増殖分化異常)について説明できる。			
6							
7	創傷治癒 炎症 感染症			創傷治癒、炎症、感染症について説明できる。			
8							
9	遺伝子・染色体の異常			遺伝子・染色体の異常疾患について説明できる。			
10							
11	代謝異常:糖・脂質代謝異常(糖尿病 脂質異常症など)			糖・脂質代謝異常疾患について説明できる。			
12							
13	代謝異常:タンパク質・核酸代謝異常			タンパク質・核酸代謝異常疾患(アミロイドーシス、通風など)について説明できる。			
14							
15	代謝異常:その他の代謝疾患(黄疸、ビタミン、ミネラル異常など)			黄疸、ビタミン、ミネラル異常などの代謝異常疾患について説明できる。			
16							
17	循環障害 出血素因 ショック			循環障害、出血素因、ショックの機序と疾患について説明できる。			
18							
19	免疫異常			免疫異常疾患について説明できる。			
20							
21	腫瘍学:発がんのメカニズム			発がんのメカニズムと代表的遺伝性がん疾患について説明できる。			
22							
23	腫瘍学:がんの浸潤・転移			がんの浸潤・転移のメカニズム及びがん病期ステージについて説明できる。			
24							
25	腫瘍学:形態学的特徴			腫瘍の形態学的特徴について説明できる。			
26							
27	加齢			加齢の機序と加齢関連疾患について説明できる。			
28							
29	学びの振り返り			これまでの授業の要点事項を整理し、説明することができる。			
30							

授業科目名	耳鼻咽喉科学		担当者名	大山健二			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	病気がみえる vol.13 耳鼻咽喉科	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚士として活動するためには、聴覚・音声言語・嚥下等に関わる疾患を担当する耳鼻咽喉科学の知識が不可欠である。 耳鼻咽喉科で扱う領域の生理機能や代表的な疾患の概要について臨床医の立場で解説し、理解を助ける。						
学習到達目標	①耳・鼻・口腔・咽頭・喉頭の構造と機能について説明できる。 ②この領域の代表的疾患の機序と対応について理解する。 ③それらの疾患による言語・聴覚・嚥下機能への影響について理解する。						
評価方法	出席・授業態度・前期試験(9月予定)						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	耳科学			耳の解剖・生理・検査 について理解する			
2							
3	耳科学			耳に関係した検査 について理解する			
4							
5	耳科学			中耳の疾患(中耳炎) についての知識を得る			
6							
7	耳科学			中耳の疾患(慢性中耳炎・伝音障害等) についての知識を得る			
8							
9	耳科学			内耳の疾患(感音難聴) についての知識を得る			
10							
11	耳科学			内耳の疾患(先天性・遺伝性難聴) についての知識を得る			
12							
13	耳科学			平衡機能障害(めまい)を呈する疾患 についての知識を得る			
14							
15	鼻科学			鼻の解剖・生理・検査 について理解する			
16							
17	鼻科学			鼻の疾患(鼻・副鼻腔炎) についての知識を得る			
18							
19	鼻科学			鼻の疾患(腫瘍等) についての知識を得る			
20							
21	口腔・咽頭科学			口腔・咽頭・喉頭の解剖・生理・検査 について理解する			
22							
23	口腔・咽頭科学			口腔・咽頭・喉頭の疾患 についての理解を得る			
24							
25	頭頸部外科学			頭頸部疾患の概要 についての知識を得る			
26							
27	補足			音声・言語・嚥下の障害 についての理解する			
28							
29	まとめ			講義全体を振り返って知識を整理する			
30							

授業科目名	一般臨床医学		担当者名	眞柳 みゆき			
			実務経験	歯科医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	適宜プリントを配付する 【参考】 他教科にて配布済のテキスト を用いる	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚療法を実施する際に役立つ医療知識を、今まで習ったことの復習もしながら説明する。						
学習到達目標	言語聴覚療法を行う際に、知っている役立つ医療知識を身につけ、た職種連携の重要性を知る。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	種々の診察法（現病歴・既往歴やバイタルサインの取り方等を含む）・検査法			種々の診察法・検査法を知る			
2							
3	画像検査法			種々の画像検査法とその読影方法を知る			
4							
5	薬物療法（投与方法・薬物効果の出方・薬剤の種類・薬剤情報等）			薬物療法について理解する			
6							
7							
8							
9							
10	周術期の衛生管理・緊急時の対応			周術期の衛生管理法と緊急時の対応を学ぶ			
11							
12	日常的な症状・急性症状と疾患について			様々な症状とその原因疾患を知る			
13							
14	感染症			疾患・医療の特徴について理解する			
15							
16	自己免疫疾患						
17							
18	遺伝性疾患						
19							
20	脳血管疾患・循環器系疾患						
21							
22	腫瘍性疾患・緩和医療						
23							
24	筋疾患・神経疾患・精神疾患						
25							
26	小児医療・老年医療・難病						
27							
28	その他の疾患・まとめ			前講までの補足とまとめ			
29							
30							

授業科目名	呼吸発声発語系の構造・機能・病態		担当者名	及川 隆司			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	病気がみえるvol.13耳鼻咽喉科(メディック・メディア) ぜんぶわかる呼吸の辞典 (成美堂出版)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	発声・発話に関わる呼吸器系、口腔周辺の構造・機能・病態についての知識は、構音障害、音声障害、嚥下障害などの専門科目を学ぶ上で必須である。ここでは、それら専門科目を学ぶための基礎を固める。						
学習到達目標	1 呼吸器系、喉頭、付属管腔の構造・機能について説明することができる。 2 発話運動における呼吸器系、喉頭、付属管腔の働きについて説明することができる。 3 呼吸器系、咽頭・喉頭、付属管腔の病態について説明することができる。						
評価方法	出席、授業態度、定期試験の点数による評価。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	呼吸器系の基本構造			呼吸器の役割について説明できる。			
2							
3	呼吸器系の基本構造			肺の構造機能、呼吸筋と吸気筋、胸郭の運動、呼吸運動の神経支配について説明できる。			
4							
5	呼吸運動のメカニズム			吸気と呼気、安静呼吸と深呼吸、各種の肺気量と呼気位、発声時の呼吸運動と呼気保持について説明できる。			
6							
7	呼吸機能検査の実際			肺活量と時間肺活量、その他の検査を学ぶ。			
8							
9	呼吸器系の病態			呼吸困難、喘鳴、異常呼吸、咳嗽、気道狭窄、過換気などについてそれぞれ説明できる。			
10							
11	喉頭の基本構造			喉頭の軟骨と靱帯、関節と筋群について説明できる。声帯と仮声帯、喉頭粘膜と分泌腺、神経と血管、年齢変化についても説明できる。			
12							
13	喉頭の機能			呼吸機能・発声機能について学ぶ。発声時の喉頭調節機能、嚥下時の喉頭調節について説明できる。			
14							
15	喉頭の病態			発声機能障害、呼吸障害について学ぶ。誤嚥・喉頭侵入(嚥下障害)について学ぶ。			
16							
17	喉頭の検査			間接喉頭検査、内視鏡検査について学ぶ。声帯振動の各種検査について学ぶ。			
18							
19	構音器官の基本構造			鼻腔、咽頭のしくみについて説明できる。			
20							
21	構音運動			構音に関する筋群の運動と神経制御について学ぶ。			
22							
23	構音器官の病態			組織欠損と奇形、運動障害、鼻咽腔閉鎖不全などについて学ぶ。			
24							
25	構音器官の検査			構音器官の各種検査について学ぶ。			
26							
27	呼吸器系についてのまとめ			呼吸器官、発声機能の構造・機能・病態の復習			
28							
29	発語系についてのまとめ			口腔、咽頭の構造・機能・病態の復習			
30							

授業科目名	聴覚系の構造・機能・病態		担当者名	大山健二			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	病気がみえる vol.13 耳鼻咽喉科	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚士として活動するためには、聴覚系の構造・機能とさまざまな病態に関する、より深い知識と理解が必要となる。前期で学習する耳鼻咽喉科学の中から、聴覚系に範囲をしばったかたちで臨床医の立場で解説し、理解を助ける。						
学習到達目標	①人間の聴覚器の構造と機能について理解する。 ②この領域の代表的疾患の機序と対応について理解する。 ③それらの疾患による言語・聴覚機能への影響について理解する。 ④聴覚障害への対応方法について理解する。						
評価方法	出席・授業態度・後期試験(2月予定)						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	ガイダンス・構造(1)			耳(聴覚器)の全体像 について理解する			
2							
3	構造(2)			外耳と中耳の構造 について理解する			
4							
5	構造(3)			内耳(蝸牛)の構造 について理解する			
6							
7	構造(4)			内耳(前庭・半規管・神経) について理解する			
8							
9	機能(1)			耳介～中耳伝音系の機能 について理解する			
10							
11	機能(2)			内耳の機能 について理解する			
12							
13	機能(3)			内耳の機能 について理解する			
14							
15	機能(4)			内耳～聴神経機能 について理解する			
16							
17	病態(1)			難聴を引き起こす病態の概観 について理解する			
18							
19	病態(2)			難聴(伝音性) について理解する			
20							
21	病態(3)			難聴(感音性) について理解する			
22							
23	病態(4)			難聴(感音性) について理解する			
24							
25	聴覚の補償			難聴への対策 について理解する			
26							
27	補足			理解しにくい点について補足する			
28							
29	まとめ			講義全体を振り返って知識を整理する			
30							

授業科目名	神経系の構造・機能・病態		担当者名	及川 隆司			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	病気がみえるvol.13脳・神経 (メディック・メディア)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	中枢神経から末梢神経までの神経の構造を学ぶ。また、正常な神経の働き、それらが障害されたときどのような障害が現れるかを学ぶ。						
学習到達目標	1 脳と神経系の構造・機能を説明できる。 2 神経系の障害による機能低下(言語聴覚士が関わる失語症、高次脳機能障害など)の機序を説明できる。 3 病態から推測される予後について説明できる。						
評価方法	出席率、授業態度、定期試験によって評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	中枢神経系と末梢神経の総論			中枢神経と末梢神経について説明できる。			
2							
3	中枢神経系の構造			大脳(皮質、辺縁系、基底核、視床、白質)の構造について学ぶ。			
4							
5	中枢神経系の構造			脳幹～小脳、脊髄、錐体路、錐体外路などについての構造を学ぶ。			
6							
7	末梢神経系の構造			脳神経の構造と働きについて学ぶ。			
8							
9	末梢神経系の構造			脊髄神経、自律神経の構造について学ぶ。			
10							
11	神経細胞の働き			神経伝導、神経伝達について説明できる。			
12							
13	中枢神経系の機能 大脳皮質の機能局在			運動野、体性感覚野、聴覚野、視覚野、前頭前野、辺縁系、言語領域について学ぶ。			
14							
15	中枢神経系の機能 伝導路			体性感覚、聴覚、視覚、小脳それぞれの伝導路について学ぶ。			
16							
17	中枢神経系の機能 大脳白質の機能			投射線維、交連線維、連合線維の機能について学ぶ。			
18							
19	中枢神経系の機能 脳幹、小脳、脊髄の機能			脳神経核、皮質核路、小脳、脊髄の機能について学ぶ。			
20							
21	末梢神経の機能			運動神経と感覚神経、神経筋接合部、知覚受容体の機能について学ぶ。			
22							
23	中枢神経系の病態			高次脳機能障害、運動麻痺(上位運動ニューロン、下位運動ニューロン)、運動失調の病態について学ぶ。			
24							
25	中枢神経系の病態			大脳基底核障害、感覚障害、脊髄障害による病態について学ぶ。			
26							
27	末梢神経系の病態			運動麻痺、感覚障害、自律神経障害による病態について学ぶ。			
28							
29	脳、神経系の検査			CT、MRI、SPECT、PETなどの各種検査について学ぶ。			
30							

授業科目名	生涯発達心理学		担当者名	山田嘉明			
			実務経験				
教科書	教科書は指定しない 配付資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	人間はどのように発達するのか。この生涯にわたる変容過程を理解し、人間の発達にかかわる諸要因および個体と環境の相互作用のあり方について学習する。身体、運動、言語、認知、情緒、社会性の側面から各発達時期での他者との関係性踏まえながら、発達の特徴を学び、発達理論を概観する。						
学習到達目標	・発達を身体・運動、言語・認知、情緒・社会性の領域に分けてとらえ、説明ができる。 ・人間の発達時期ごとの特徴や特色を他者との関係性を踏まえて説明できる。 ・主な発達理論を理解し、説明できる。						
評価方法	レポート提出(30%)、期末試験(70%)						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	生涯発達心理学とは			発達の用語の定義、近代の発達研究、研究方法について説明できる。			
2							
3	胎生期における発達			胎生期(胚期、胎芽期、胎児期)における発達の特徴について説明できる。			
4							
5	周産期における発達			周産期障害、母子保健統計、周産期死亡率、低出生体重児、胎児発育に影響する要因、アプガースコアについて説明できる。			
6							
7	新生児期・乳児期・幼児期における発達(1)			新生児行動評価法、カウプ指数、乳幼児身体発育調査、原始反射、姿勢反射、平衡反応、髄鞘形成、運動発達について説明できる。			
8							
9	新生児期・乳児期・幼児期における発達(2)			一語文、多語文、幼児語、認知発達、イメージを利用した遊びについて説明できる。			
10							
11	新生児期・乳児期・幼児期における発達(3)			情緒の分化、社会化、愛着、微笑、人見知り、分離不安、遊びの発達について説明できる。			
12							
13	発達検査			遠城寺式乳幼児分析的発達検査、日本版デンバー式発達スクリーニング検査、新版K式発達検査2001、乳幼児精神発達診断法(津守・稲毛式)、KIDS乳幼児発達スケールについて説明できる。			
14							
15	児童期における発達			ローレル指数、運動技能、思考における中心化、保存の理解、記憶方略、防衛機制について説明できる。			
16							
17	青年期における発達			二次性徴、形式的操作思考、心理社会的モラトリアム、アイデンティティについて説明できる。			
18							
19	成人期における発達			身体的変化、生活習慣病、結晶性能力、流動性能力、発達課題について説明できる。			
20							
21	老年期における発達			生理的変化、認知機能の変化、継続性理論、SOC理論、死への対応について説明できる。			
22							

23	発達理論(1)ーゲゼルの成熟理論, フロイトの心理学的発達理論	発達課題, 発達段階, ゲゼルの成熟理論, フロイトの心理学的発達理論について説明できる。
24		
25	発達理論(2)ーエリクソンの心理社会的発達理論	エリクソンの心理社会的発達理論について説明できる。
26		
27	発達理論(3)ーピアジェの認知的発達理論等	ピアジェの認知的発達理論(均衡化, シェマ, 同化, 調節, 感覚運動期, 前操作期, 具体的操作期, 形式的操作期), ヴィゴツキーの最近接領域, ブルーナーの足場かけについて説明できる。
28		
29	まとめ	発達関連用語, 発達における共通性, 発達に影響を与える要因について説明できる。これまでの復習とまとめを行う。
30		

授業科目名	学習・認知心理学		担当者名	山田嘉明			
			実務経験				
教科書	教科書は指定しない 配付資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	人は環境から情報を取り入れ、認識し、記憶し、それをを用いて思考し、互いにコミュニケーションをとっている。学習・認知心理学の授業前半では学習のタイプと学習行動を対象とし、行動の予測や制御に関する事項・原理を学び、後半では学習形態、学習と記憶の関係、思考や言語といった仕組みや働きについて学ぶ。						
学習到達目標	・学習・認知心理学で用いられる主要な概念を理解し、説明できる。						
評価方法	レポート提出(30%)、定期試験(70%)						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	学習・認知心理学とは			学習心理学と認知心理学の定義、研究方法、生得的行動と獲得性行動、馴化・脱馴化、鋭敏化について説明できる。			
2							
3	古典的条件づけ(レスポナント条件づけ)			レスポナント条件づけ、条件づけスケジュールについて説明できる。強化と消去、連続強化と部分強化			
4							
5	道具的条件づけ(オペラント条件づけ)			オペラント条件づけ、強化スケジュールについて説明できる。強化と弱化、強化プログラム			
6							
7	認知的アプローチ、刺激性制御			洞察説、サイン-ゲシュタルト説、認知地図、三項随伴性、経時弁別訓練、同時弁別訓練、般化勾配について説明できる。			
8							
9	刺激等価性、回避学習			言語・表象機能の発現における刺激等価性(等価関係)、回避学習、学習性無力感について説明できる。			
10							
11	技能学習、社会的学習			知覚-運動学習、知覚-運動協応、観察学習、模倣学習、モデリング、代理強化について説明できる。			
12							
13	学習法、学習の転移、学習の成立要因			全習法と分習法、集中法と分散法、学習の転移、全習法と分習法、集中法と分散法、学習の転移について説明できる。			
14							
15	記憶と学習(1)			記憶の過程、記憶の区分、感覚記憶、短期記憶、長期記憶、ワーキングメモリについて説明できる。			
16							
17	記憶と学習(2)			長期記憶の区分、陳述記憶、手続記憶について説明できる。			
18							
19	記憶と学習(3)			記憶方略、忘却、自伝的記憶、予定記憶について説明できる。			
20							
21	思考、問題解決			収束的思考、拡散的思考、問題解決、ヒューリスティックス、創造的思考、発想支援について説明できる。			
22							

23	知識と推論	階層的ネットワークモデル, 活性化拡散モデル, スキーマ理論, 心的回転について悦名できる。
24		
25	言語	非言語的コミュニケーション, 言語的コミュニケーション, 二項関係, 三項関係について説明できる。
26		
27	メタ認知	メタ認知的知識, メタ認知的活動(モニタリング, コントロール)について説明できる。
28		
29	まとめと復習	これまでのまとめと復習を行う
30		

授業科目名	言語学Ⅰ		担当者名	関谷 友里			
			実務経験				
教科書	Crosslink 言語聴覚療法学テキスト 言語学・言語発達学	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	言語とは何か・・・言語は私たち人間が日常生活を営む上で重要なコミュニケーション道具の一つである。その言葉について理解を深め、当たり前のように使っている言語に対して理解する力や分析する力を身に着ける。						
学習到達目標	言語学に関する基礎的知識を用い、言語聴覚士として必要な知識を理解できる						
評価方法	出席・授業態度・授業内課題・前期末試験(9月実施予定)						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	オリエンテーション						
2	言葉の特徴を考える(言語学の基礎)			言語学とは			
3	言葉の特徴を考える(言語学の基礎)			言語の基本的な性質			
4	言葉の特徴を考える(言語学の基礎)			言語の特徴			
5	日本語の音を考える(音韻論)			音素			
6	日本語の音を考える(音韻論)			国際音声記号			
7	日本語の音を考える(音韻論)			モーラ			
8	日本語の音を考える(音韻論)			アクセント			
9	日本語の音を考える(音韻論)			複合語のアクセント			
10	日本語の音を考える(音韻論)			形態音韻論			
11	日本語の音を考える(音韻論)			連濁と転音			
12	日本語の単語を考える(形態論・意味論)			語とは何か			
13	日本語の単語を考える(形態論・意味論)			語の成り立ち			
14	日本語の単語を考える(形態論・意味論)			語種			
15	日本語の単語を考える(形態論・意味論)			語の意味			
16	日本語の単語を考える(形態論・意味論)			動詞の活用と自他			
17	日本語の文法を考える(統語論)			格関係と項			
18	日本語の文法を考える(統語論)			文法カテゴリー(ヴォイス・テンス)			
19	日本語の文法を考える(統語論)			文法カテゴリー(アスペクト・モダリティ)			
20	日本語の文法を考える(統語論)			複文			
21	日本語のバリエーションを考える			地域方言			
22	日本語のバリエーションを考える			社会方言			
23	日本語のバリエーションを考える			敬語・やさしい日本語			
24	日本語のバリエーションを考える			言語変化			
25	日本語の文字を考える			言語における文字			
26	日本語の文字を考える			漢字			
27	日本語の文字を考える			仮名			
28	日本語の文字を考える			表記法			
29	まとめ			振り返り			
30	まとめ			国家試験対策			

授業科目名	音声学Ⅰ		担当者名	関谷 友里			
			実務経験				
教科書	Crosslink 言語聴覚療法学テキスト 音響・音声学	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	音声を生成する仕組みや音声の特徴、それらに必要な知識について理解する。						
学習到達目標	音声学に関する基礎的知識を用い、言語聴覚士として必要な知識を理解できる						
評価方法	出席・授業態度・授業内課題・後期末試験(2月実施予定)						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	オリエンテーション						
2	音声			音声の基本的な性質			
3	音声			音声のグループ分け			
4	音声			音声器官			
5	音声			呼吸の仕組みと音声器官の名称			
6	文節音(単音)			音声の記述方法			
7	文節音(単音)			国際音声記号			
8	文節音(単音)			母音			
9	文節音(単音)			日本語の母音といろいろな言語の母音			
10	文節音(単音)			子音			
11	文節音(単音)			IPAの子音①			
12	文節音(単音)			IPAの子音②			
13	文節音(単音)			50音の発音記号			
14	文節音(単音)			音声と音韻			
15	文節音(単音)			音節とモーラ			
16	文節音(単音)			色々な音声現象①			
17	文節音(単音)			色々な音声現象②			
18	超文節的特徴(韻律的特徴)			リズム			
19	超文節的特徴(韻律的特徴)			モーラ			
20	超文節的特徴(韻律的特徴)			アクセント			
21	超文節的特徴(韻律的特徴)			日本語のアクセントの変化			
22	超文節的特徴(韻律的特徴)			動詞のアクセント			
23	超文節的特徴(韻律的特徴)			日本語のアクセントと他の言語のアクセント			
24	超文節的特徴(韻律的特徴)			イントネーション			
25	超文節的特徴(韻律的特徴)			文末のイントネーション			
26	超文節的特徴(韻律的特徴)			パラ言語情報			
27	超文節的特徴(韻律的特徴)			非言語情報			
28	超文節的特徴(韻律的特徴)			性質による感情の表出			
29	まとめ			振り返り			
30	まとめ			国家試験対策			

授業科目名	音響学		担当者名	櫻井 潤			
			実務経験	企業等での実務経験あり			
教科書	言語聴覚療法学テキスト 音響・音声学	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚士の臨床に不可欠な音響分野の知識を学ぶ。また、音響学的な現象としての「声」を客観的に理解する。						
学習到達目標	①物理現象としての音を理解する。②音圧と音圧レベルについて理解する。③音のスペクトルについて理解する。④フォルマント周波数ついて理解する。⑤音源フィルタ理論について理解する。⑥音声のデジタル化について理解する。						
評価方法	出席・授業態度・前期試験(9月予定)						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	物理現象の音について①			音の振動について理解する。			
2	物理現象の音について②			音声現象について理解する。			
3	物理現象の音について②			音源について理解する。			
4	音圧と音圧レベルについて①			圧力変化としての音について理解する。			
5	音圧と音圧レベルについて②			音圧と音圧レベルの違いについて理解する。			
6	音圧と音圧レベルについて③			音速・波長・周波数について理解する。			
7	音圧と音圧レベルについて④			デシベル(dB)について理解する。			
8	音の伝わり方について①			疎密波について理解する。			
9	音の伝わり方について②			音の放射・回折について理解する。			
10	音の伝わり方について③			音の反射・屈折について理解する。			
11	音のスペクトルについて①			各種ノイズについて理解する。			
12	音のスペクトルについて②			周波数成分について理解する。			
13	音のスペクトルについて③			音の波形について理解する。			
14	音のスペクトルについて④			基音と倍音について理解する。			
15	音のスペクトルについて⑤			線スペクトルと連続スペクトルについて理解する。			
16	共鳴・共振について①			音の共鳴(共振)について理解する。			
17	共鳴・共振について②			空気振動について理解する。			
18	共鳴・共振について③			共鳴周波数について理解する。			
19	共鳴・共振について④			フォルマント周波数について理解する。			
20	音声生成について①			フーリエ解析について理解する。			
21	音声生成について②			音声波形について理解する。			
22	音声生成について③			音源、声道、口腔の働きについて理解する。			
23	音声生成について④			音源フィルタ理論について理解する。			
24	言語音の生成と知覚について①			発生音ついて理解する。			
25	言語音の生成と知覚について②			母音の音響特性ついて理解する。			
26	言語音の生成と知覚について③			子音の音響特性ついて理解する。			
27	言語音の生成と知覚について④			韻律と特殊拍について理解する。			
28	音声の記録方法とデジタル信号処理について①			音声のデジタル化について理解する。			
29	音声の記録方法とデジタル信号処理について②			標本化と量子化について理解する。			
30	音声の記録方法とデジタル信号処理について③			音声のデジタル処理について理解する。			

授業科目名	言語発達学		担当者名	熊谷 美緒			
			実務経験	言語聴覚士として療育施設等での勤務経験あり			
教科書	言語聴覚療法学テキスト 言語学・言語発達学／メジカルビュー社	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	子どもがどのように言葉を獲得していくのか、を学ぶ。						
学習到達目標	前言語期、幼児期、学童期それぞれの発達段階における言語発達について理解できる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	「ことば」の発達とは何だろう			言語発達の基盤について理解する。			
2							
3	言語発達を説明する理論①			学習説、生得説について理解する。			
4							
5	言語発達を説明する理論②			認知説、社会・相互交渉説について理解する。			
6							
7	前言語期の発達①			コミュニケーション行動の発達、共同注意の発達について理解する。			
8							
9	前言語期の発達②			発声行動・言語音知覚の発達について理解する。			
10							
11	前言語期の発達③			グループワーク			
12							
13	1～2歳の言語発達①			初語の出現・語彙の増加、言語発達を促す大人の役割について理解する。			
14							
15	1～2歳の言語発達②			構文の発達、象徴機能の発達について理解する。			
16							
17	1～2歳の言語発達③			グループワーク			
18							
19	幼児期の言語発達①			語彙の発達、構文の発達について理解する。			
20							
21	幼児期の言語発達②			談話の発達、音韻意識の発達について理解する。			
22							
23	幼児期の言語発達③			グループワーク			
24							
25	学童期の言語発達①			読み書き能力の発達について理解する。			
26							
27	学童期の言語発達②			語彙・構文の発達について理解する。			
28							
29	学童期の言語発達③			グループワーク			
30							

授業科目名	リハビリテーション概論		担当者名	島田 真須美			
			実務経験	言語聴覚士として診療所等での勤務経験あり			
教科書	医学生・コメディカルのための 手引書 リハビリテーション概 論－改訂第4版－/田島文博編 著/永井書店	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	専門職として必要なリハビリテーションの理念及び定義を学ぶ。						
学習到達 目標	①リハビリテーションの理念について理解できる。②リハビリテーションの過程について理解できる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	リハビリテーションの概念・理念・定義			リハビリテーションの概念について理解する。			
2							
3	健康と障害の概念と分類①			ICD、ICIDH、ICFについて理解する。			
4							
5	健康と障害の概念と分類②						
6							
7	障害の心理的・社会的視点			障害の心理的・社会的視点について理解する。			
8							
9	ヒトの発達と評価			小児期のリハビリテーションの概要について理解する。			
10							
11	リハビリテーション過程①			リハビリテーションの一連の流れ(情報収集、評価、 目標設定、訓練プログラム立案、実施、再評価)につ いて理解する。			
12							
13	リハビリテーション過程②						
14							
15	リハビリテーションの諸段階			リハビリテーションの段階について理解する。			
16							
17	医療とリハビリテーション専門職種と役割①			医療・福祉に携わる関連職種の役割について理解する。			
18							
19	医療とリハビリテーション専門職種と役割②						
20							
21	チームアプローチ			チーム医療について理解する。			
22							
23	ADL、QOLの概念と評価法①			ADLの概念・評価法(BI・FIM)及びQOLの概念・評価 法について理解する。			
24							
25	ADL、QOLの概念と評価法②						
26							
27	医療・リハビリテーション医療			診療報酬、義肢装具について理解する。			
28							
29	高齢者・健康対策と少子化対策			高齢者・健康対策と少子化対策について理解する。			
30							

授業科目名	言語聴覚障害学概論		担当者名	片岡 由夏			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	最新言語聴覚学講座 言語聴覚障害学概論 (医歯薬出版)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚士(ST)の成り立ちや職域、専門職としてSTに求められる資質、能力について講義する。また、多岐にわたる言語聴覚障害に関して、その概要を講義する。言語、聴覚、心理、コミュニケーションの基礎についても解説する。						
学習到達目標	言語聴覚士(ST)がどのような専門職なのか、理解し、説明できる。また、言語聴覚障害にはどのようなものがあるのか、その原因や症状について理解し、概要を説明できるようになることを目標とする。						
評価方法	出席、受講態度、課題、試験(9月)の結果から総合的に評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	オリエンテーション / 言語聴覚士(ST)について			講義の進み方、内容に関して、見通しを持つ。言語聴覚士とはどのような仕事か理解する。			
2							
3	言語聴覚士(ST)の成り立ちと、職務			国内外の言語聴覚士の歴史や、その成り立ちについて理解する。また、言語聴覚士の職域について理解する。			
4							
5	言語とは何か、また日本語の特徴			「言語」について理解し、「言語とは何か?」という問いに対して、自分の言葉で説明できるようにする。また日本語の特徴についても学ぶ。			
6							
7	言語とコミュニケーション、言語の獲得			コミュニケーションとは何か、言語とコミュニケーションの違いについて説明できるようになる。また、言語発達についても学ぶ。			
8							
9	脳と言語、発声発語器官、聴覚、平衡器官			言語の中核である脳、発声発語、聴覚に関する器官について学び、理解する。			
10							
11	言語聴覚障害の評価、診断、治療			言語聴覚障害の評価、診断、治療に関して、大まかな流れを理解する。			
12							
13	言語聴覚障害総論			多岐にわたる言語聴覚障害にはどのようなものがあるのか、その概要を理解する。			
14							
15	高次脳機能障害			高次脳機能障害について、その原因、症状、病巣に関し、学び、理解する。			
16							
17	認知症			認知症とはどのようなものか、その定義を説明できるようにする。また認知症の症状や原因について理解する。			
18							
19	失語症			失語症とは何か、原因、病巣、症状について、学び、理解する。また、大まかな分類や対応についても学ぶ。			
20							
21	構音障害			構音障害の種類、原因、症状に関して学び、構音障害以外の言語障害との違いを理解する。			
22							
23	音声障害			音声障害について、その原因、症状を学び、理解する。発声の仕組みについても学び、理解する。			
24							

25	摂食嚥下障害	摂食、嚥下に関わる器官と、正常な嚥下について理解する。その上で摂食嚥下障害と、その原因、症状、対応について理解する。
26		
27	発達障害、吃音	発達障害、吃音に関して、診断基準や症状について知り、理解する。発達障害の評価の概要についても学ぶ。
28		
29	聴覚障害	聴覚障害の種類や症状、検査/評価の方法について、その概要を理解する。聴覚補償や代替手段についても学ぶ。
30		

授業科目名	失語症Ⅰ		担当者名	萱場 文			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	・失語症 臨床標準テキスト ・ぜんぶわかる 脳の事典 ・配布資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	失語症における言語症状、タイプ分類、、失語症の近縁症状について学び、失語症の基礎知識の習得をめざす。						
学習到達目標	・失語症の症状の理解の習得をめざす。 ・失語症と他の言語障害の違いを説明できるようになる。 ・臨床の基本の考え方となるよう、失語症のタイプ分類について理解できるようになる。						
評価方法	出席・授業態度・期末試験の結果から総合的に判断します。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	オリエンテーション 失語症の歴史 失語症の定義			失語症の定義について説明できる。			
2	鑑別 意識障害 認知症			失語症の近縁の症状について、失語症との違いを説明できる。			
3	鑑別 構音障害 発語失行 その他						
4	失語症の原因疾患 脳血管障害 脳外傷			失語症の原因疾患について説明できる。			
5	失語症の原因疾患 脳腫瘍 神経変性疾患						
6	病巣①			失語症に関連する大脳の言語領域について説明できる。			
7	病巣②						
8	言語の側性化						
9	失語症の定義まとめ			「失語症とは」家族や友人に話すようにわかりやすく、定義、原因疾患を説明できる。			
10	一般症状 精神状態の把握 神経心理症状の把握			失語症者の精神状態、神経心理症状について説明できる。			
11	言語症状の分析モデル① 聴覚的理解 単語読解過程			言語症状の分析モデルで理解面の症状を説明できる。			
12	言語症状の分析モデル② 発話表出 文字・音変換 書字表出過程			言語症状の分析モデルで発話面の症状を説明できる。			
13	発話面の症状① 流暢性 構音とプロソディーの障害			流暢性、構音とプロソディーについて説明できる。			
14	発話面の症状② 喚語困難 錯語 ジャルゴン 失文法 錯文法 接近行為 残語・再帰性発話			喚語困難、錯語、ジャルゴン、失文法、錯文法、接近行為、残語・再帰性発話について説明できる。			
15	理解面の症状① 語音認知 単語の理解			語音認知、単語の理解について説明できる。			
16	理解面の症状② 文の理解 談話障害			文の理解、談話障害について説明できる。			
17	復唱障害			復唱障害について説明できる			
18	読字障害			読字障害について説明できる。			
19	書字障害			書字障害について説明できる。			
20	古典型失語症候群① ブローカー失語 ウエルニッケ失語			ブローカー失語、ウエルニッケ失語について説明できる。			
21	古典型失語症候群② 伝導失語 健忘失語 全失語			伝導失語、健忘失語、全失語について説明できる。			
22	古典型失語症候群③ 混合型			混合型失語について説明できる。			
23	古典型失語症候群④ まとめ			古典型失語症候群のタイプ分類ができる。			

24	純粋型① 純粋語啞 純粋語聾 純粋失読	純粋語啞、純粋語聾、純粋失読について説明できる。
25	純粋型② 純粋失書 その他の読字・書字障害 失読失書	純粋失書、その他書字障害、失読失書について説明できる。
26	非定型失語群	非定型失語群について説明できる。
27	原発性進行性失語	原発性進行性失語について説明できる。
28	小児失語 定義 鑑別 原因疾患 病巣 タイプ 臨床像 評価診断 言語訓練 学習指導	小児失語の定義、原因疾患、病巣、タイプ 臨床像、評価診断、言語訓練、学習指導について説明できる。
29	まとめ・復習①	言語症状・失語症候群について理解し、知識を習得できたか確認する。
30	まとめ・復習②	

授業科目名	失語症評価法		担当者名	萱場 文／島田 真須美			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	・標準失語症検査マニュアル改訂第2版 ・WAB失語症検査/医学書院 ・失語症臨床標準テキスト/医歯薬出版(株)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	演習
		30					
授業概要	失語症者に対する臨床での評価法について学ぶ。						
学習到達目標	検査法の内容を理解し、その手続き、教示方法、結果の記載、解釈ができるようにする。						
評価方法	出席・授業態度・期末試験の結果から総合的に判断します。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	評価・診断 スクリーニング検査 検査実施上の留意点			検査実施上の留意点を学ぶ			
2	MMSE・HDS-Rの演習			基本的なスクリーニング検査の目的を学び、実施できるようにする			
3	WABの概要			WABの目的・内容について説明できる			
4	WAB 自発話 演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
5	WAB 話し言葉の理解 演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
6	WAB 復唱・呼称 演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
7	WAB 読み 演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
8	WAB 書字 演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
9	WAB 行為・構成行為・視空間行為・計算 演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
10	WAB 失語指数・皮質指数 演習			指数の算出方法がわかる			
11	WAB 実技 ペアになって教示をだしてみる			検査の教示を正しく提示できるようになる			
12	WAB 実技 ペアになって教示をだしてみる			検査の教示を正しく提示できるようになる			
13	WAB 演習①			検査を実施し、適切に評価できるようになる			
14	WAB 演習②			検査を実施し、適切に評価できるようになる			
15	WAB 演習③			検査を実施し、適切に評価できるようになる			
16	SLTAの概要			SLTAの目的・内容について説明できる			
17	SLTA 聞く側面 単語の理解 短文の理解			手順に沿って検査を実施できるようになる			
18	SLTA 聞く側面 複雑な口頭命令			手順に沿って検査を実施できるようになる			
19	SLTA 話す側面 演習 呼称 単語の復唱 動作説明			手順に沿って検査を実施できるようになる			
20	SLTA 話す側面 演習まんがの説明 文の復唱 ご列挙 音読			手順に沿って検査を実施できるようになる			
21	SLTA 読む側面 演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
22	SLTA 書く側面 計算演習			手順に沿って検査を実施できるようになる			
23	SLTA 実技 ペアになって教示をだしてみる			検査の教示を正しく提示できるようになる			
24	SLTA 実技 ペアになって教示をだしてみる			検査の教示を正しく提示できるようになる			
25	SLTA 演習①			検査を実施し、適切に評価できるようになる			
26	SLTA 演習②			検査を実施し、適切に評価できるようになる			
27	SLTA 演習③			検査を実施し、適切に評価できるようになる			
28	SLTA 演習④			検査を実施し、適切に評価できるようになる			
29	SLTA まとめ			検査を実施法を理解できた確認する			
30							

授業科目名	高次脳機能障害Ⅰ		担当者名	島田真須美			
			実務経験	言語聴覚士として診療所等での勤務経験あり			
教科書	高次脳機能障害学 第3版 阿部晶子、吉村貴子 編 医学書院 2022	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚士が主に関わる失語症は、高次脳機能障害の1つであり、失語症者は他の高次脳機能障害を合併している場合がある。症状理解の一助として高次機能障害について知る必要があるため、基本概念を学び、発症機序や症状、評価方法、リハビリテーションの基本的な知識を身につける。						
学習到達目標	高次脳機能障害の基本概念を学び、各種の高次機能障害の発症機序や症状、評価方法、リハビリテーションの基本的な知識を修得する。						
評価方法	出席、授業態度、期末試験から総合的に評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	高次脳機能障害総論			高次脳機能障害の基本概念を理解する			
2							
3	視覚認知の障害			視覚認知の障害について説明できる			
4							
5	視空間障害			視空間障害について説明できる			
6							
7	聴覚認知の障害			聴覚認知の障害認について説明できる			
8							
9	触覚認知の障害			触覚認知の障害について説明できる			
10							
11	身体意識・病態認知の障害			身体意識・病態認知の障害について説明できる			
12							
13	行為・動作の障害			行為・動作の障害について説明できる			
14							
15	記憶障害			記憶障害について説明できる			
16							
17	前頭葉と高次脳機能障害			前頭葉と高次脳機能障害について説明できる			
18							
19	脳梁離断症状			脳梁離断症状について説明できる			
20							
21	認知症			認知症について説明できる			
22							
23	原発性進行性失語			原発性進行性失語について説明できる			
24							
25	脳外傷による高次脳機能障害			脳外傷による高次脳機能障害について説明できる			
26							
27	認知コミュニケーション障害			認知コミュニケーション障害について説明できる			
28							
29	高次脳機能障害のリハビリテーションにおける言語聴覚士の役割			高次脳機能障害のリハビリテーションにおける言語聴覚士の役割について説明できる			
30							

授業科目名	高次脳機能障害Ⅱ		担当者名	島田真須美			
			実務経験	言語聴覚士として診療所等での勤務経験あり			
教科書	高次脳機能障害学 第3版 阿部晶子、吉村貴子 編 医学書院 2022	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚士が主に関わる失語症は、高次脳機能障害の1つであり、失語症者は他の高次脳機能障害を合併している場合がある。症状理解の一助として高次機能障害の発症機序や症状、対応方法、リハビリテーションについて詳述する。						
学習到達目標	各種の高次機能障害の発症機序や症状、対応方法、リハビリテーションに関する知識を修得する。						
評価方法	出席、授業態度、期末試験から総合的に評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	高次脳機能障害総論			高次脳機能障害の基本概念を理解する			
2							
3	視覚認知障害の評価とリハビリテーション			視覚認知障害の評価とリハビリテーションについて説明できる			
4							
5	視空間障害の対応とリハビリテーション			視空間障害の対応とリハビリテーションについて説明できる			
6							
7	聴覚認知障害の対応とリハビリテーション			聴覚認知障害の対応とリハビリテーションについて説明できる			
8							
9	触覚認知障害の対応とリハビリテーション			触覚認知障害の対応とリハビリテーションについて説明できる			
10							
11	身体意識・病態認知の障害の対応とリハビリテーション			身体意識・病態認知障害の対応とリハビリテーションについて説明できる			
12							
13	行為・動作の障害の対応とリハビリテーション			行為・動作の障害の対応とリハビリテーションについて説明できる			
14							
15	記憶障害の対応とリハビリテーション			記憶障害の対応とリハビリテーションについて説明できる			
16							
17	前頭葉障害の対応とリハビリテーション			遂行機能障害の対応とリハビリテーションについて説明できる			
18							
19	脳梁離断症状の対応とリハビリテーション			脳梁離断症状の対応とリハビリテーションについて説明できる			
20							
21	認知症の対応とリハビリテーション			認知症の対応とリハビリテーションについて説明できる			
22							
23	原発性進行性失語の対応とリハビリテーション			原発性進行性失語の対応とリハビリテーションについて説明できる			
24							
25	脳外傷による高次脳機能障害の対応とリハビリテーション			脳外傷による高次脳機能障害の対応とリハビリテーションについて説明できる			
26							
27	認知コミュニケーション障害の対応とリハビリテーション			認知コミュニケーション障害の対応とリハビリテーションについて説明できる			
28							
29	高次脳機能障害のリハビリテーションにおける言語聴覚士の役割			高次脳機能障害のリハビリテーションにおける言語聴覚士の役割について説明できる			
30							

授業科目名	言語発達障害		担当者名	熊谷 美緒			
			実務経験	言語聴覚士として療育施設等での勤務経験あり			
教科書	STクリア言語聴覚療法4 言語発達障害／建帛社	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	小児の言語発達障害についての基礎知識を学び、対象児への支援に必要な評価方法及び訓練方法を学ぶ。						
学習到達目標	①発達障害の代表例について理解できる。②小児領域に必要な検査の概要を理解できる。 ③発達段階や障害特性に応じた訓練方法について理解できる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	第1章 定型的な言語発達			前期の復習も兼ねて、グループごとにまとめて発表する。			
2							
3	第2章 言語発達障害学			言語発達障害の捉え方、関連する疾患を理解する。 発達障害の原因と背景を理解する。			
4	定義、関連する障害、病態						
5	第3章 言語発達障害の評価			評価の視点、側面を理解する。			
6	評価とは、情報収集、行動観察						
7	検査、評価のまとめと方針の設定			言語発達検査の種類、記録の取り方について理解できる。			
8	記録の取り方、報告書の書き方						
9	第4章 指導・支援について			発達段階に即した指導について理解し、説明できる。			
10	指導・支援とは、発達段階に即した指導						
11	各種指導・支援の方法			各種指導・支援の方法及び、個別指導と集団指導の違いを理解し、説明できる。			
12	個別指導と集団指導、保護者・家族支援						
13	第5章－Ⅰ 知的発達症			知的発達症について、定義・特徴的な症状及び指導方法を説明できる。			
14	定義、有病率・原因、症状、評価、指導・支援						
15	第5章－Ⅱ 脳性麻痺・重症心身障害			脳性麻痺・重症心身障害について、定義・特徴的な症状及び指導方法を説明できる。			
16	定義、有病率・原因、症状、評価、指導・支援						
17	第5章－Ⅲ 自閉症スペクトラム症			自閉症スペクトラムについて、定義・特徴的な症状及び指導方法を説明できる。			
18	定義、有病率・原因、症状、評価、指導・支援						
19	第5章－Ⅳ 特異的言語発達障害			特異的言語発達障害について、定義・特徴的な症状及び指導方法を説明できる。			
20	定義、有病率・原因、症状、評価、指導・支援						
21	第5章－Ⅴ 学習障害			学習障害について、定義・特徴的な症状及び指導方法を説明できる。			
22	定義、有病率・原因、症状、評価、指導・支援						
23	第5章－Ⅵ 注意欠如多動症			注意欠如多動症について、定義・特徴的な症状及び指導方法を説明できる。			
24	定義、有病率・原因、症状、評価、指導・支援						
25	第5章－Ⅶ 後天性言語障害			後天性言語発達障害について、定義・特徴的な症状及び指導方法を説明できる。			
26	定義、有病率・原因、症状、評価、指導・支援						
27	第6章 多職種との連携			小児領域に関わる他職種を理解し、連携するうえでの原則を説明できる。			
28	多職種とは、連携の原則 など						
29	まとめ			総合的なまとめをおこなう。			
30							

授業科目名	運動性構音障害Ⅰ		担当者名	佐々木 貴行			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	・「言語聴覚士のための運動障害性構音障害学」 廣瀬肇他著 医歯薬出版 ・配布資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	STが行うリハビリテーションの中核ともいえる運動障害性構音障害を解剖・生理・神経学の確認をしながら概要を理解していく。また、評価に必要な知識の初歩も学び、理解を深める。						
学習到達目標	運動障害性構音障害の原因と構音障害の分類を理解し、自らの言葉で説明できる。 評価(AMSD)の目的とマニュアルについて理解できる。						
評価方法	出席、授業態度、レポート、筆記試験を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	運動障害性構音障害とは			COM障害の中での運動障害性構音障害を理解			
2							
3	運動障害性構音障害の基礎 1(原因や種類について)			解剖生理学をもとに 運動障害性構音障害の基礎を理解			
4							
5	運動障害性構音障害の基礎 1.5(原因や種類について)			解剖生理学をもとに運動障害性 構音障害の基礎を理解し説明できる			
6							
7	運動障害性構音障害の基礎2 (解剖・生理の視点から)			運動障害性構音障害の 原因や種類の基礎を理解			
8							
9	運動障害性構音障害の基礎2.5 (解剖・生理の視点から)			運動障害性構音障害の原因 や種類を理解し説明できる			
10							
11	運動障害性構音障害の基礎3 (正常と異常の違いを知る)			正常な構音と異常の基礎的な違いを理解			
12							
13	運動障害性構音障害の基礎3.5 (正常と異常の違いを知る)			正常な構音と異常の基礎的 な違いを理解し説明できる			
14							
15	ことばの産生のしくみ1			発話機構について理解する			
16							
17	ことばの産生のしくみ2			発話機構について理解し説明できる			
18							
19	運動障害性構音障害のタイプ分類1			障害のタイプ分類を理解する			
20							
21	運動障害性構音障害のタイプ分類2			障害のタイプ分類を理解し説明できる			
22							
23	運動障害性構音障害の評価の基礎1			評価方法の視点と種類を理解する			
24							
25	運動障害性構音障害の評価の基礎2			評価方法を理解し実践できる			
26							
27	運動障害性構音障害のリハビリテーションの基礎			運動障害性構音障害の リハビリテーションを理解できる			
28							
29	運動障害性構音障害Ⅰについて振り返り			これまでの復習を行い 自分の言葉で説明できる			
30							

授業科目名	摂食嚥下障害Ⅰ		担当者名	萱場 文／小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	摂食嚥下障害学 第2版／医学書院	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	講義
		30					
授業概要	小児から成人・高齢者までの摂食嚥下機能の発達と成熟、加齢に伴う変化を追いながら、健常者の摂食嚥下の機序を学ぶ。そのうえで、摂食嚥下障害を引き起こす病態、嚥下運動を阻害する原因を把握するため、言語聴覚士が行える検査・評価についての知識を身につける。摂食嚥下リハビリテーションのチームアプローチにおけるSTの役割についても学ぶ。						
学習到達目標	・小児から成人までの摂食嚥下のメカニズム、病態を理解する。 ・摂食嚥下障害の検査・評価方法を習得し、問題点を抽出することができる。						
評価方法	出席・授業態度、期末試験から総合的に評価します。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	乳幼児期の正常な嚥下機能の発達と嚥下の概念			摂食嚥下機能定型発達について説明できる。			
2							
3	小児の摂食嚥下障害			小児の摂食嚥下障害の概要と原因を学ぶ。			
4							
5	正常な嚥下 嚥下の概念 嚥下の期と相 嚥下モデルについて(成人)			嚥下の定義や概念について説明できる。嚥下における「期」と「相」、各嚥下モデルについて理解する。			
6	嚥下器官のしくみとはたらき① 神経制御、呼吸の協調性			神経制御、呼吸の協調性について理解し、説明できる。			
7	嚥下器官のしくみとはたらき② 口腔とその周囲(口唇、頬、歯槽部・歯列)			口腔とその周囲(口唇、頬、歯槽部・歯列)について理解し、説明できる。			
8	嚥下器官のしくみとはたらき③ 口腔とその周囲(口蓋、下顎、舌)			口腔とその周囲(口蓋、下顎、舌)について、理解し、説明できる。			
9	嚥下器官のしくみとはたらき④ 口腔とその周囲(咽頭・喉頭)、食道			口腔とその周囲(咽頭・喉頭)、食道について理解し、説明できる。			
10	成人の嚥下障害① 概要及び運動障害に伴う摂食嚥下障害(脳血管疾患、進行性神経筋疾患)			成人の摂食嚥下障害の概要について説明できる。運動障害に伴う摂食嚥下障害について理解し、説明できる。			
11							
12							
13	成人の嚥下障害② 悪性腫瘍・高次脳機能・認知症に伴う摂食嚥下障害、その他(COPD、精神疾患、薬剤、頸椎病変による嚥下障害)			悪性腫瘍・高次脳機能・認知症に伴う摂食嚥下障害、その他のCOPD、精神疾患、薬剤、頸椎病変による嚥下障害について理解し、説明できる。			
14							
15	成人の合併症とリスク管理① 誤嚥性肺炎、窒息			成人の合併症とリスク管理(誤嚥性肺炎、窒息)について理解し、説明できる。			
16	成人の合併症とリスク管理② 気管カニューレ、低栄養、脱水、非経口栄養			成人の合併症とリスク管理(気管カニューレ・低栄養、脱水、非経口栄養)について理解し、説明できる。			
17							
18	言語聴覚士に求められる感染症対策			言語聴覚士に求められる感染症対策について、説明できる。			
19	言語聴覚士の基本的役割 チームアプローチ			言語聴覚士の基本的役割、チームアプローチについて説明できる。			
20	成人の摂食嚥下障害の評価 評価の流れ、情報収集、問診 ・臨床評価 ・スクリーニングテスト			成人の摂食嚥下障害の評価・評価の流れ、情報収集、問診・臨床評価・スクリーニングテストについて理解し、説明できる。			
21							
22							

23	嚥下造影(VF) 嚥下造影とは 嚥下造影の実際 嚥下造影の見方	嚥下造影(VF)、嚥下造影の実際、検査法の見方について理解し、説明できる。
24		
25	嚥下内視鏡検査(VE) VF・VEの短所・長所 その他の検査	嚥下内視鏡検査(VE)、その他の検査について理解し、説明できる。VF・VEのそれぞれの短所、長所について説明できる。
26		
27	加齢に伴う摂食嚥下障害	加齢に伴う摂食嚥下障害について、変化、特徴について説明できる。
28	情報の統合 臨床推論と介入計画の立案 嚥下障害の有無 病態把握 摂食嚥下障害の重症度 予後予測 訓練適応 リスクマネジメント 介入計画立案	嚥下障害の有無、病態把握、摂食嚥下障害の重症度、予後予測、訓練適応、リスクマネジメント、介入計画立案について説明できる。
29		
30	まとめ	摂食嚥下障害の概要・分類・評価・検査・チームアプローチ・介入計画などについて知識を獲得できたか確認する

授業科目名	聴覚障害Ⅰ		担当者名	小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	聴覚障害学 第3版 (医学書院)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	1	前期	必修	講義
		30					
授業概要	聴覚障害についての基礎知識を学び、聴覚障害児・者が置かれている様々な状況に言語聴覚士がどのように対応、支援していくかを多面的に考察する。今後は、高齢の聴覚障害の割合も増えると予想され、高齢者の心理的特性と障害との関連、支援の方法について学ぶ。1年次は主に成人・高齢者の聴覚障害と補聴器装用までの支援について学習する。						
学習到達目標	聴覚障害とは何か？から始まり、小児の聴覚障害と発達の過程から、ろう者、中途失聴者、高齢者と様々なライフステージで抱える課題を理解し、そのリハビリテーション支援方法を考えることができるようにする。						
評価方法	出席・授業態度、試験により評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	聴覚の発達から考える。			聴覚の機能と意義を説明できる。			
2	聴覚障害とは何か？発症率・分類、障害の程度を学ぶ。			難聴が生活に及ぼす影響について理解する。			
3	聴覚障害とライフステージについて学ぶ。			難聴の心理的影響について理解する。			
4	聴覚障害のリハビリテーションの概要について学ぶ。			難聴リハビリテーションの概要を説明できる。			
5	音とは何か。音の性質、音波について学ぶ。			音の性質について理解する。			
6	音圧レベルと聴力レベルについて学ぶ。			聴覚と音響学との関係を理解する。			
7	聴覚の心理的特、ラウドネス、ピッチについて学ぶ。			聴覚における音の3要素を説明できる。			
8	マスキングの概念を学ぶ。			マスキングと聴力検査について説明できる。			
9	両耳聴、音源定位～ことばの知覚・認知を学ぶ。			両耳聴効果について説明できる。			
10	聴覚の発生～構造機能の概要を学ぶ。			聴覚器官の発生を説明できる。			
11	聴覚の発生～構造機能の概要を学ぶ。			聴覚器官の構造・機能の概要を説明できる。			
12	聴覚生理と語音聴取～補充現象について学ぶ。			有毛細胞と補充現象の関係を理解する。			
13	伝音難聴と感音難聴の概要を学ぶ。			聴覚障害の原因について説明できる。			
14	中枢性疾患、遺伝性による難聴を学ぶ。			聴覚障害の原因について説明できる。			
15	平衡器官の発生、構造、機能の概要を学ぶ。			平衡器官とめまいについて説明できる。			
16	聴覚補償機器～補聴器の基本的知識を学ぶ。			補聴器の構造・機能の概要を説明できる。			
17	補聴器の調整機能について学ぶ。			補聴器の調整原理と調整法を説明できる。			
18	補聴器の特性測定デモの実際を学ぶ。			聴覚障害と補聴器の必要性を理解する。			
19	成人の補聴器適合と装用指導の概要を学ぶ。			補聴器の適合から試聴までを理解する。			
20	成人の補聴器適合と装用指導の概要を学ぶ。			補聴器の試聴から装用後まで説明できる。			
21	小児の補聴器適合について概要を学ぶ。			成人と小児の補聴器適合の違いを理解する。			
22	成人難聴のリハビリテーションの概要を学ぶ。			ライフステージでの課題を説明できる。			
23	成人難聴の評価、補聴効果の評価を学ぶ。			成人難聴へのSTの関わり方を説明できる。			
24	補聴器以外のコミュニケーション手段について学ぶ。			コミュニケーション手段の多様性を理解する。			
25	超高齢社会での難聴への支援方法を学ぶ。			中途難聴における補聴の課題を説明できる。			
26	補聴器装用へのSTの役割を学ぶ。			補聴器適合のチーム成員と役割を理解する。			
27	語音聴取改善のための聴取訓練を学ぶ。			視覚情報の活用方法について説明できる。			
28	コミュニケーションストラテジーの概要を学ぶ。			STが支援するコミュニケーションストラテジーを理解する。			
29	難聴発症時期別におけるSTの支援を学ぶ。			重症度によるコミュニケーション障害の改善に向けた支援を説明できる。			
30	高齢期発症例に対する指導・支援を学ぶ。			高齢期難聴に対しSTに期待される役割について説明できる。			

授業科目名	聴覚検査法Ⅰ		担当者名	小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	聴覚検査の実際 改訂4版 (日本聴覚医学会)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
	聴覚障害学 第2版 (医歯薬出版)	時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	演習
		30					
授業概要	1年次では、純音聴力検査、自記オーディオメトリー、閾値上聴力検査、語音聴力検査、インピーダンス・オーディオメトリーについてそれらの検査の方法を学ぶ。実際に検査を実施するにあたり、これらの検査機器の使用方法はもとより、検査の目的、検査結果から対象者に何を伝えるのかを十分に理解し、安全かつ適切な方法で検査の演習を行う。						
学習到達目標	言語聴覚士が行う聴力検査のために必要な知識を学び、検査機器の特性・機能について説明できる。実際にオーディオメータに触れ、基本的な操作をできるようにする。						
評価方法	出席率と授業態度。定期試験で評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	聴覚検査の予備知識 耳の構造と機能の復習			聴覚検査の前に予習・復習しておくこと。			
2	聴覚検査の予備知識 難聴その種類とオーディオグラムとの関係			聴覚検査の前に前期の復習をしておく。			
3	音の基礎知識 音圧レベルと聴力レベルなど復習			音の知識についても復習しておくこと。			
4	オーディオメータとは？その機能について演習(グループ・ワーク)			実際にオーディオメータに触れて確かめる。			
5	聴覚検査を行うに際しての心構えと注意事項			聴力検査の目的を理解する。			
6	純音聴力検査 気導聴力検査の準備とオーディオグラム			オーディオグラムの見方を理解する。			
7	検査法 予備検査～本検査の演習(グループ・ワーク)			検査機器を適切に操作できる。			
8	気導聴力検査の演習(グループ・ワーク)			検査機器を適切に操作できる。			
9	骨導聴力検査 その意義と検査方法			気導・骨導聴力検査の違いを説明できる。			
10	マスキングとは何か？ マスキング法の手順			マスキング効果について説明できる。			
11	骨導聴力検査の演習(グループ・ワーク)			骨導聴力検査を適切に実施できる。			
12	骨導聴力検査の演習(グループ・ワーク)			骨導聴力検査を適切に実施できる。			
13	気導・骨導聴力検査の振り返り(グループ・ワーク)			聴力検査の手順と操作を復習する。			
14	自記オーディオメトリー 演習(グループ・ワーク)			自記オーディオメトリーを説明できる。			
15	閾値上聴力検査と補充現象について			補充現象について説明できる。			
16	語音聴力検査 その意義と方法			語音聴力検査を適切に実施できる。			
17	語音聴力検査の演習(グループ・ワーク)			語音聴力検査を適切に実施できる。			
18	自記オーディオメトリー、語音聴力検査振り返り(グループ・ワーク)			各検査を通しての疑問点をグループ・ワークで話し合い、発表する。			
19	インピーダンス・オーディオメトリー 検査の目的と種類			インピーダンス・オーディオメータの検査の目的と評価を理解する。			
20	ティンパノメトリー 演習(グループ・ワーク)			機器を適切に操作することができる。			
21	耳小骨筋反射検査 演習(グループ・ワーク)			機器を適切に操作することができる。			
22	インピーダンス・オーディオメトリー 振り返り(グループ・ワーク)			検査の評価・結果を説明できる。			
23	耳管機能検査 方法・結果と解釈			耳管機能検査を理解する。			
24	選別聴力検査 新生児・乳幼児・学童選別検査			新生児・乳幼児・学童における聴力検査を理解する。			
25	他覚的聴力検査 聴性脳幹反応検査			聴性脳幹反応検査を説明できる。			
26	耳音響放射 OAEとEOAE			OAEとEOAEを説明できる。			
27	乳幼児聴力検査 BOA、COR演習(グループ・ワーク)			遊戯聴力検査を説明できる。			
28	CORの演習振り返り(グループ・ワーク)			COR検査を適切に実施できる。			
29	機能性難聴の検査について			機能性難聴について説明できる。			
30	これまでの各検査のまとめ			各種検査について復習する。			

授業科目名	臨床実習Ⅰ		担当者名	島田真須美、萱場文、眞柳みゆき、 小坂井秀行、熊谷美緒			
			実務経験	言語聴覚士または歯科医師として病院等での 勤務経験あり			
教科書	適宜紹介する	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	1	後期	必修	実習
		45					
授業概要	病院や福祉施設など実習施設において、実際の臨床場面を見学することで言語聴覚士の仕事への意識を高めることを目的とする。言語聴覚療法、摂食嚥下療法、小児発達支援などの見学を通して、言語聴覚士のことば使い、態度、身のこなし、基本的スキルの実際を学ぶ。実習前の校内での実習指導と実習後の個人面談での臨床実習指導者からの評価及び自己評価をもとに、今後の課題と目標を考察し、実習の総括とする。						
学習到達 目標	言語聴覚士の仕事、求められる資質について理解し、学生自身、自分に何が足りないのかを明確にして今後の努力目標をたてる。						
評価方法	実習指導者の評価50%。実習前後の学内指導評価50%。						
時数	授 業 内 容						
45時間	〈見学実習の目的〉 言語聴覚士や関連職種の見学を通してその役割を理解し、対象者への対応や職業人・社会人としての態度を学ぶ。 また、実際の言語聴覚療法の場面を見学することで、臨床の場の理解を深め、言語聴覚士の仕事の面白さ、医療チームの一員としての役割を知ることが見学実習の目的である。 〈見学実習の目標〉 (1) 言語聴覚士の仕事を見学することで、リハビリテーション専門職に就くための自覚をもつ。 (2) 多職種連携、リハビリテーションチームとは何かを学ぶ。 (3) 記録・報告をすることを学ぶ。 (4) 対象者へのことば使い、接し方を学ぶ。 〈実習計画〉 (1) 実習施設は言語聴覚士が仕事に従事している医療機関または社会福祉施設とする。 (2) 指導者の勤務体系に合わせた時間内で、実習時間は1日8時間とする。 (3) 実習施設での言語聴覚士の臨床場面を見学する。 (4) 毎日の実習日誌を記録し、バイザーから指導を受ける。 (5) 実習終了後、実習報告書を学校に提出する。 (6) 校内の実習報告会で発表し、実習後の指導を受ける。						

授業科目名	英語Ⅲ		担当者名	都築 玲子			
			実務経験				
教科書	The Hospital Team 作成資料	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	病院の中では、どのような医療従事者がどのような仕事を通じて患者の回復のサポートをおこなっているか理解する。代表的な医療職種について理解する。						
学習到達目標	多職域連携を目指し、互いの職域を知るなかで、基本的な英語力を再構築していく。						
評価方法	出席、クラス参加、課題提出、小テスト、期末試験の結果の総合評価とする。						
時数	授 業 内 容			学習課題・留意事項など			
1	Unit 8. The Medical Laboratory Technologist			臨床検査技師の仕事について理解できる。単語、読解			
2	Unit 8. The Medical Laboratory Technologist			Listening,穴埋め、英作文練習、Additional Information			
3	Unit 9 Clinical Engineering			臨床工学士の仕事について理解する。単語、読解			
4	Unit 9 Clinical Engineering			Listening,穴埋め、英作文練習、Additional Information			
5	Unit 10 Radiological Technology			診療放射線技師の仕事はどのようなものか理解する。単語、読解			
6	Unit 10 Radiological Technology			Listening,穴埋め、英作文練習、Additional Information			
7	Unit 11 Physical Therapy			理学療法士とその仕事を理解する。単語、読解			
8	Unit 11 Physical Therapy			Listening,穴埋め、英作文練習、Additional Information			
9	Unit 12 Working in Occupational therapy			作業療法士の仕事を理解する。単語、読解			
10	Unit 12 Working in Occupational therapy			Listening,穴埋め、英作文練習、Additional Information			
11	Unit 14 Orthoptics and Visual Science			視覚機能療法について理解する。単語、読解			
12	Unit 14 Orthoptics and Visual Science			Listening,穴埋め、英作文練習、Additional Information			
13	Unit 15 Why Team Medical Treatment Necessary?			医療の質を向上させるためにすべての医療スタッフの連携プレーが必要な頃を理解できる。			
14	Unit 15 Why Team Medical Treatment Necessary?			Listening,穴埋め、英作文練習、Additional Information			
15	まとめ vocabulary 復習						
16	What to know about speech therapy			言語療法の概論について理解する。			
17	Speech therapy for children			子供に対する言語療法について理解する。			
18	Speech therapy for adults			成人に対する言語療法について理解する。			
19	Conditions: stuttering			言語障害の主な症状について理解する:どもりについて			
20	Aphasia			失語症について説明できる。			
21	Articulation disorders			構音障害について説明できる。			
22	Specific language impairment			特定の言語障害について理解する。			
23	Resonance disorders			共鳴障害について理解する。			

24	Assessment	評価の仕方、基準について理解する。
25	Alternatives music therapy/Music	音楽療法について理解する。
26	Neurofeedback treatment,	ニューロフィードバック治療とはどのようなものか理解する。
27	Parent-implemented language interventions	親が実施する言語介入とはどのようなものか理解する。
28	Aphasia: what you need to know	失語症について: 知っておくべきこと。
29	Types and symptoms	失語症の種類と症状について知る。
30	Fluent Aphasia Wernicke's aphasia	流ちょうな失語症: ウエルニッケ失語症とはどのようなものか

授業科目名	英語Ⅳ		担当者名	都築 玲子			
			実務経験				
教科書	作成資料	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚士が対応するであろう代表的な事例についての記事を読み込み、必要な英語表現を理解し習得する。						
学習到達目標	患者と接するなかで必要な用語の英語表現を知り、学術論文、医療記事などを読解することができる。						
評価方法	出席、クラス参加、課題提出、小テスト、期末試験の結果の総合評価とする。						
時数	授 業 内 容			学習課題・留意事項など			
1	Non-Fluent Aphasia Broc's aphasia			ブローカ失語症とはどのようなものか。			
2	Global aphasia			最も重篤な失語症とはどのようなものか。			
3	Review			まとめと復習			
4	Causes of Aphasia			失語症の原因について理解する。			
5	Diagnosis			失語症の診断について理解できる。			
6	Treatment			失語症の治療について知る。			
7	How to help			失語症の患者にどのように援助するか理解する。			
8	Complications			合併症について理解する。			
9	Prevent stroke, prevent aphasia			脳卒中の予防、失語症の予防について知る。			
10	What to know about speech therapy for Autism			自閉症の患者への言語療法について理解する。			
11	overview			自閉症の患者への言語療法の概要			
12	Benefits of speech therapy			言語療法を受けることの利点について理解する。			
13	What to do to encourage children to speak			子どもたちの発話をうながす方法について知る。			
14	According to ages of children			子どもたちの年齢によってどのように指導するか理解する。			
15	DVD： Autism professor			自閉症の患者がいかにして動物福祉の研究分野で成功したか知る。			
16	Downsides			療法の限界と欠点について理解する。			
17	other treatments			そのほかの療法について検索する。			
18	summary			まとめと復習			
19	What is auDHD？			auDHDとは何か理解する。			
20	How are autism and ADHD similar？			自閉症とADHDはどのように類似しているか知る。			
21	How are autism and ADHD similar？						

22	How are autism and ADHD different?	自閉症とADHDはどのように違うか知る。
23	How are autism and ADHD different?	
24	What does auDHD look like?	auDHDの所見について知る。
25	What does auDHD look like?	
26	How do professionals diagnose auDHD?	どのようにauDHDは診断されるか。
27	How do professionals diagnose auDHD?	
28	Support for auDHD	auDHDへの有効な援助について知る。
29	Support for auDHD	
30	Summary	まとめと復習

授業科目名	保健体育Ⅱ		担当者名	沼田 尚			
			実務経験				
教科書	なし	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	演習
		30					
授業概要	本授業では、様々な運動を体験することで、実践することの「楽しさ」を理解し、必要な基礎的運動技術を獲得することを目的とし、生涯、スポーツへと関わっていくための運動習慣やコミュニケーション能力の習得、養成、向上を図る。						
学習到達目標	① 怪我をしないようにみんなで楽しみながら、様々な運動を積極的に体験し、基礎的運動技術を獲得・向上させる。 ② 様々なスポーツのルールを理解する。 ③ 体づくり運動を行うなかで、自己の柔軟性や身体の動きを理解する。 ④ スポーツを通して、コミュニケーション能力を習得、養成、向上する。						
評価方法	・ 受講態度(80%)…出席状況と授業への取り組む姿勢・態度など。 ・ 技術習得と理解度(20%)…各種目における、技術の習得とルールの理解度などをみる。実技試験を行う場合もある。 ・ 課題レポート…適宜レポートの提出を求めることもある。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	オリエンテーション			授業への取り組む姿勢・態度に気を付ける			
2	ストレッチ運動			体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する			
3	身体づくり運動1(筋力トレーニング)			体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する			
4	身体づくり運動2(筋力トレーニング)			体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する			
5	縄を使った運動1			体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する			
6	縄を使った運動2			体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する			
7	道具を使ったスポーツ1(バドミントン・卓球)			体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する			
8	道具を使ったスポーツ2(バドミントン・卓球)			体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する			
9	道具を使ったスポーツ3(バドミントン・卓球)			体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する			
10	道具を使ったスポーツ4(バドミントン・卓球)			体調を整えて、自身の現状を認知し、体力に合わせて実施する			
11	道具を使ったスポーツ5(バドミントン・卓球)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
12	道具を使ったスポーツ6(バドミントン・卓球)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
13	道具を使ったスポーツ7(バドミントン・卓球)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
14	道具を使ったスポーツ8(バドミントン・卓球)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
15	道具を使ったスポーツ9(バドミントン・卓球)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
16	道具を使ったスポーツ10(バドミントン・卓球)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
17	道具を使ったスポーツ11(レクリエーションスポーツ)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
18	道具を使ったスポーツ12(レクリエーションスポーツ)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
19	道具を使ったスポーツ13(レクリエーションスポーツ)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			
20	道具を使ったスポーツ14(レクリエーションスポーツ)			体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する			

21	道具を使ったスポーツ15(インディアカ)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
22	道具を使ったスポーツ16(インディアカ)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
23	道具を使ったスポーツ17(インディアカ)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
24	道具を使ったスポーツ18(インディアカ)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
25	道具を使ったスポーツ19(ソフトバレーボール)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
26	道具を使ったスポーツ20(ソフトバレーボール)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
27	道具を使ったスポーツ21(ソフトバレーボール)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
28	道具を使ったスポーツ22(ソフトバレーボール)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
29	道具を使ったスポーツ23(シットティングバレーボール)	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する
30	道具を使ったスポーツ24(シットティングバレーボール) まとめ	体調を整えてコミュニケーションを取りながら積極的に参加する

授業科目名	内科学		担当者名	玉井ときわ			
			実務経験	医師として病院勤務の経験あり			
教科書	crosslink basic リハビリテーションテキスト 内科学 / メジカルビュー社	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必須	講義
		30					
授業概要	言語聴覚療法を行う上で関わりの大きい疾患を中心に内科領域の疾患についてその概要・特徴を説明する						
学習到達目標	内科領域の疾患についてその概要・特徴を理解する						
評価方法	出席・試験の結果等を考慮して総合的に判断する						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	内科学概論			内科学の概要について理解する			
2							
3							
4	診断学総論			内科学の診断法について診察の流れ・検査を学び理解する			
5							
6	治療学総論			内科的治療法を知る			
7							
8	循環器疾患①			循環器疾患について学ぶ			
9	循環器疾患②						
10	循環器疾患③						
11	呼吸器疾患・感染症①			呼吸器疾患・感染症について学ぶ			
12	呼吸器疾患・感染症②						
13	呼吸器疾患・感染症③						
14	消化管疾患①			消化器疾患について学ぶ			
15	消化管疾患②						
16	肝・胆・膵①			肝・胆・膵疾患について学ぶ			
17	肝・胆・膵②						
18	アレルギー・リウマチ・膠原病			アレルギー・リウマチ・膠原病について学ぶ			
19	腎・泌尿器疾患			腎・泌尿器疾患について学ぶ			
20	電解質異常			電解質異常について学ぶ			
21	内分泌疾患			内分泌疾患について学ぶ			
22	代謝疾患①			代謝疾患について学ぶ			
23	代謝疾患②						
24	血液疾患①			血液疾患について学ぶ			
25	血液疾患②						
26	脳神経疾患①			脳神経疾患について学ぶ			
27	脳神経疾患②						
28	婦人科疾患			婦人科疾患について学ぶ			
29	中毒・熱中症など			中毒・熱中症について学ぶ			
30	復習・まとめ			前講までに学んだことを復習する			

授業科目名	小児科学		担当者名	菊池 敦生			
			実務経験	医師として病院勤務の経験あり			
教科書	小児科学・発達障害学 医学書院	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
		30					
授業概要	小児は、発達途上であるため同じ疾患でも成人とは異なる病態を示すことが多いため、成人との相違点にも着目しながら解説していく						
学習到達目標	小児の疾患についてその概要・特徴を理解する						
評価方法	出席・試験の結果等を考慮して総合的に判断する						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	小児科学とは			小児科学を学ぶ意義を知る			
2	小児の発達・成長①			小児の発達・成長の概念・評価法を学ぶ			
3	小児の発達・成長②						
4	小児保健①			乳児健診・予防接種等に関して学ぶ			
5	小児保健②						
6	小児疾患の診断法①			小児疾患の各種診断法を学ぶ			
7	小児疾患の診断法②						
8	遺伝疾患と先天異常①			遺伝性疾患・先天異常について学ぶ			
9	遺伝疾患と先天異常②						
10	新生児疾患①			新生児の特徴や新生児疾患について学ぶ			
11	新生児疾患②						
12	神経・骨・筋肉疾患①			けいれん・てんかんと等をはじめとする神経系や筋ジストロフィー・重症筋無力症などの筋肉疾患等について学ぶ			
13	神経・骨・筋肉疾患②						
14	循環器疾患①			循環器系の正常な血液動態・構造を理解し、循環器疾患について学ぶ			
15	循環器疾患②						
16	感染症			感染症について学ぶ			
17	消化器疾患①			消化器系の解剖生理を理解し、先天性疾患をはじめとした消化器系疾患について学ぶ			
18	消化器疾患②						
19	消化器疾患③						
20	内分泌・代謝疾患①			内分泌・代謝疾患について学ぶ			
21	内分泌・代謝疾患②						
22	免疫・アレルギー疾患・膠原病①			免疫・アレルギー疾患・膠原病について学ぶ			
23	免疫・アレルギー疾患・膠原病②						
24	腎・泌尿器・生殖器疾患①			腎・泌尿器・生殖器の解剖生理を学び、疾患について理解する			
25	腎・泌尿器・生殖器疾患②						
26	血液疾患・悪性腫瘍①			血液疾患・悪性腫瘍について学ぶ			
27	血液疾患・悪性腫瘍②						
28	心身症・神経症①			心身症・神経症について学ぶ			
29	心身症・神経症②						
30	眼科・耳鼻科疾患			眼科・耳鼻科疾患について学ぶ			

授業科目名	精神医学		担当者名	及川 隆司			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	「標準理学療法学・作業療法学」専門基礎分野 精神医学第2版 医学書院	単位数	学科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2年	通年	必修	講義
		30					
授業概要	精神医学的な症状と診察手法、および主要な疾患の症状・治療を概説する。また精神科領域における社会保障制度を講義する。						
学習到達目標	精神医学の基礎的概念を理解し、臨床各論の知識を身につける						
評価方法	授業への出席と筆記試験の総合成績						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	総論・精神医学概観			精神医学の歴史を学び、現代の精神医学的な考え方を理解する。			
2	疾患分類、精神症状の概要(1)			精神疾患の分類を学ぶ。主要な精神症状を理解する。			
3	精神症状の概要(2)			主要な精神症状を理解する			
4	精神症状の概要(3)			主要な精神症状を理解する			
5	精神障害の診断(1)			精神科的診察手法と診断について学ぶ			
6	精神障害の診断(2)			精神科医療で用いられる各種検査について			
7	脳器質性精神障害(1)、認知症の概要			認知症を生じる脳器質性疾患を学ぶ			
8	脳器質性精神障害(2)			認知症以外の脳器質性疾患による精神障害を学ぶ			
9	症状性精神障害			内科疾患等に付随する精神障害を学ぶ			
10	精神作用物質による障害			薬物を含む精神作用物質が精神機能に及ぼす影響を理解する			
11	てんかんの分類と症状			各種てんかんの内容、症状を理解し、てんかん脳波の見方を学ぶ			
12	てんかんの治療とケア			てんかんの薬物治療を学ぶ			
13	統合失調症の概要と症状(1)			統合失調症の概念を学ぶ			
14	統合失調症の概要と症状(2)			統合失調症の症状を理解する			
15	統合失調症の経過と予後、治療(1)			統合失調症の分類と予後を学ぶ			
16	統合失調症の経過と予後、治療(2)			統合失調症の薬物治療を学ぶ			
17	気分障害(1)			気分障害の概念を学ぶ			
18	気分障害(2)			うつ病の病態と症状を理解する			
19	気分障害(3)			双極性障害を理解し、気分障害の薬物治療			

20	神経症性障害(1)	神経症の考え方と疾患分類を学ぶ
21	神経症性障害(2)	神経症としての各種病態、症状を理解する
22	生理的・心理的要因による障害	神経因性食思不振と睡眠障害について学ぶ
23	人格障害と発達障害	人格の考え方とその障害、および発達障害の概要を理解する
24	精神遅滞	精神遅滞を生じる疾患を学び、精神遅滞の
25	ライフサイクルと精神障害(1)	出生から死に至るライフサイクルの中で生じる種々の精神科的問題を考察する
26	ライフサイクルと精神障害(2)	各ライフステージにおける主要な精神障害を
27	精神障害の治療とリハビリテーション(1)	精神科医療で用いられる薬物とその治療効果を学ぶ
28	精神障害の治療とリハビリテーション(2)	薬物以外の精神科的治療手法を学ぶ
29	精神保健医療と福祉(1)	精神保健福祉法を中心とした、精神科領域の法的基盤を理解する
30	精神保健医療と福祉(2)	精神科医療と各種福祉制度との関連を理解する

授業科目名	リハビリテーション医学		担当者名	及川 隆司			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	Crosslink basic	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
	リハビリテーション医学	2					
	MEDICAL VIEW	時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
	適宜:プリントを配付	30					
授業概要	リハビリテーション医学について、その概要から各疾患・障害ごとのリハビリテーション療法について解説する						
学習到達目標	リハビリテーション医療の概要を知り、疾患・障害の特徴をおさえ、適したリハビリテーション療法を選択できるようになる						
評価方法	出席・試験の結果等を考慮して総合的に判断する						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	リハビリテーション医学の理念と定義①			リハビリテーション医学の理念・定義を学び、一般医療と異なる点・障害の分類法を理解する。			
2	リハビリテーション医学の理念と定義②						
3	健康と生活機能①			心身機能・身体構造の評価法を学び、リハビリテーションにおける「参加」の概念を理解する。			
4	健康と生活機能②						
5	健康と生活機能③						
6	リハビリテーション医療の計画・リスク管理			リハビリテーション療法について学び、チーム医療として各職種がどのように連携して進めていくか等計画できるようになる。			
7	チーム医療・多職種連携						
8	リハビリテーション医療を取り巻く制度・法律						
9	リハビリテーション療法(理学・作業・言語聴覚療法)			リハビリテーション療法と装具、自助具等について使用法を学び、また、住環境の整え方を知る。			
10	装具・補助用具・自助具と環境						
11	ICUにおけるリハビリテーション			対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する			
12	心大血管・脳血管・神経筋疾患のリハビリテーション						
13	運動器リハビリテーション			対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する			
14	呼吸器リハビリテーション						
15	がん患者リハビリテーション			対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する			
16	腎臓リハビリテーション						
17	糖尿病リハビリテーション			対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する			
18	リンパ浮腫複合的治療						
19	障害児(者)リハビリテーション			対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する			
20	難病患者リハビリテーション						
21	摂食機能療法			対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する			
22	失語症のリハビリテーション						

23	視覚障害・聴覚障害・平衡障害に対するリハビリテーション	対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する
24	排尿・排便障害に対するリハビリテーション，精神作業療法	
25	高次脳機能障害・認知症のリハビリテーション	対象疾患・障害について学び、適したリハビリテーション療法を理解する
26	スポーツ復帰・障害者スポーツ・脊髄損傷に対するリハビリテーション	
27	上肢・下肢切断者のリハビリテーション	
28	近未来のリハビリテーション医療	ICTを利用したリハビリテーション療法や予防対策を学ぶ
29	ロコモティブシンドローム・サルコペニア・フレイル・生活習慣病対策	
30	緩和期・終末期のリハビリテーション医療	緩和期・終末期のリハビリテーション療法を知る

授業科目名	臨床神経学		担当者名	及川 隆司			
			実務経験	医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	なし	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
	適宜:プリントを配付	2					
	【参考文献】	時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
	病気がみえるvol.7 脳・神経	30					
授業概要	神経系の解剖生理を復習しながら、神経系疾患に関して、その症状・診査表・治療法等について解説する						
学習到達目標	神経系の疾患について、説明できるようにする						
評価方法	出席・試験の結果等を考慮して総合的に判断する						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	神経系の解剖生理①			神経系の解剖生理学を理解する			
2	神経系の解剖生理②						
3	神経学的検査			神経系疾患の検査・診察法を学ぶ			
4	神経症候学(神経学的診察)						
5	脳血管障害① 脳梗塞			疾患の原因・特徴・治療法や対処法について学ぶ			
6	脳血管障害② くも膜下出血			〃			
7	脳血管障害③ 一過性虚血性心疾患・もやもや病			〃			
8	頭部外傷(外傷性脳損傷)			〃			
9	脳腫瘍①			〃			
10	脳腫瘍②			〃			
11	中枢神経系感染症① 脳炎・髄膜炎			〃			
12	中枢神経系感染症② 脳膿瘍・プリオン病(CDJ)			〃			
13	神経変性疾患① パーキンソン病			〃			
14	神経変性疾患② ハンチントン病			〃			
15	神経変性疾患③ ALS(筋萎縮性側索硬化症)			〃			
16	神経変性疾患④ その他の疾患			〃			
17	認知症① アルツハイマー型認知症			〃			
18	認知症② レビー小体型認知症			〃			
19	認知症③ 前頭側頭葉変性症			〃			
20	認知症④ 血管性認知症			〃			
21	認知症⑤ その他の認知症をきたす疾患			〃			
22	水頭症			〃			
23	脱髄疾患① 多発性硬化症			〃			
24	脱髄疾患② その他の脱髄疾患			〃			
25	末梢神経障害			〃			
26	筋疾患(ミオパチー)			〃			
27	神経筋接合部疾患①			〃			
28	神経筋接合部疾患②			〃			
29	代謝性疾患			〃			
30	その他			〃			

授業科目名	歯科口腔外科学		担当者名	眞柳 みゆき			
			実務経験	歯科医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	最新言語聴覚学講座 臨床歯科医学・口腔外科学	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	顎口腔領域の構造・機能・疾患について分かりやすく説明していく。						
学習到達目標	発声発語機能・摂食嚥下機能に関わる顎口腔領域の構造・機能・発生・疾患について理解する。						
評価方法	出席・課題への取り組み・試験の結果を考慮して総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	歯科概論 歯科とは？			歯科医療について理解する			
2	歯・口腔・顎・顔面の構造① 歯・歯周組織			歯・口腔・顎・顔面の構造について理解する			
3	歯・口腔・顎・顔面の構造② 顔面・頸部の形態・構造						
4	歯・口腔・顎・顔面の構造③ 顔面・顎・口腔・歯の発生と発育						
5	歯・口腔・顎・顔面の機能① 咀嚼機能(1)			歯・口腔・顎・顔面の機能について理解する			
6	歯・口腔・顎・顔面の機能② 摂食嚥下機能						
7	歯・口腔・顎・顔面の機能③ 構音障害						
8	歯・口腔・顎・顔面の診察法			歯科での診察法を知る			
9	う蝕・歯髄炎・根尖性歯周炎			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
10	う蝕以外の硬組織疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
11	歯周組織の疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
12	歯髄炎・根尖性歯周炎			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
13	う蝕以外の硬組織疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
14	歯周組織の疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
15	歯列不正 歯・歯周組織の欠損			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
16	歯の萌出・数・形態・形成の異常			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
17	口腔・顎・顔面の先天異常・発育異常①			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
18	口腔・顎・顔面の先天異常・発育異常②			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
19	口腔・顎・顔面の外傷			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
20	口腔・顎・顔面の炎症・感染症			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
21	口腔・顎・顔面の嚢胞・類似疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
22	唾液腺疾患・口腔乾燥症			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
23	顎関節疾患・口腔粘膜疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
24	口腔に症状を現す血液疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
25	口腔・顎・顔面の神経系疾患			疾患および歯科医学的処置について学ぶ			
26	口腔ケア			口腔ケアに関して学ぶ			
27	口腔機能障害に対する対応			言語・嚥下障害に対する歯科医学的対応を学ぶ			
28	口腔機能発達不全症			各疾患及び加齢による口腔機能障害に対する歯科医学的対応を学ぶ			
29	中枢性疾患						
30	加齢による口腔機能障害						

授業科目名	臨床心理学		担当者名	山田嘉明			
			実務経験				
教科書	臨床心理学 配付資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	心理的問題をもつ人(クライアント)の臨床心理学的査定法と心理的援助方法について学ぶ。前半では臨床心理学の背景, 研究方法について概観し, 不安症や身体症状症, 強迫症, 解離症, 統合失調症, 双極症, うつ病等を理解する。臨床心理学的査定法については面接法と主な心理検査を学習する。心理的援助方法は精神分析的方法, 認知行動療法, クライアント中心療法を中心に後半でみていく。						
学習到達目標	・不安症や身体症状症, 強迫症, 解離症, 統合失調症, 双極症, 摂食障害などの症状を理解し, 説明できる。 ・臨床心理学的査定法を理解し, 説明できる。 ・主な心理療法を理解し, 説明できる。						
評価方法	レポート提出(20%), 期末試験(80%)						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	臨床心理学とは何か			臨床心理学の定義, 対象, 臨床心理士・公認心理士について説明できる。			
2							
3	伝統的診断分類			精神的な変調に関する伝統的な診断分類について説明できる。			
4							
5	DSMによる診断分類, 不安症・身体症状症・強迫症・解離症など			DSMによる診断分類, 不安症, 身体症状症, 強迫症, 解離症などの症状や障害について説明できる。			
6							
7	統合失調症			統合失調症の症状や障害について説明できる。			
8							
9	双極症, 抑うつ症群			双極症やうつ病等の症状や障害について説明できる。			
10							
11	心身症ー摂食障害			摂食障害(神経性無食欲症, 神経性大食症)の症状や障害について説明できる。			
12							
13	発達障害			自閉スペクトラム症, 注意欠如・多動症, 限局性学習障害について説明できる。			
14							
15	臨床心理学的査定法(1)ー面接法, 心理検査, 知的機能スクリーニング検査			面接法, 心理検査の種類, 知的機能スクリーニング検査について説明できる。			
16							
17	臨床心理学的査定法(2)ー知能検査			ビネー式知能検査, ウェクスラー式知能検査について説明できる。			
18							
19	臨床心理学的査定法(3)ーパーソナリティ検査			主なパーソナリティ検査について説明できる。パーソナリティ検査の実例をみる。			
20							
21	臨床心理学的査定法(4)ー神経心理学的検査			リハビリテーション分野などでよく利用される神経心理学的検査について説明できる。			
22							
23	心理療法(1)ー精神分析的方法			心理療法(精神療法)の定義, 方法, 精神分析的アプローチについて説明できる。			
24							
25	心理療法(2)ー認知行動療法			行動療法, 認知療法, 認知行動療法について説明できる。			
26							
27	心理療法(3)ークライアント中心療法			クライアント中心療法について説明できる。			
28							
29	心理療法(4)ー集団療法, 家族療法など			集団療法, 家族療法について説明できる。			
30							

授業科目名	認知心理学		担当者名	山田嘉明			
			実務経験				
教科書	教科書は指定しない 配付資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
		30					
授業概要	認知心理学は学習、感覚・知覚、記憶、思考、理解など対象を認識する心の働きや、新たに得られた知識に基づく行動の制御を含めた認知の過程、情報処理過程を明らかにしようとする心理学の領域である。この授業では感覚、知覚、イメージ、記憶、学習、注意、問題解決、思考などの領域を考察の対象とする。						
学習到達目標	・人の感覚・知覚・認知過程について理解し、主要な概念や用語を使い説明できる。						
評価方法	レポート提出(20%)、期末試験(80%)						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	認知心理学とは			対象、方法論			
2							
3	感覚・知覚(1)ー感覚			感覚、感覚モダリティ、感覚受容器、感覚閾値			
4							
5	感覚・知覚(2)ー感覚における物理量と心理量			ウェーバーの法則、フェヒナーの法則、等ラウドネスレベル曲線、メル尺度、ソーン尺度			
6							
7	感覚・知覚(3)ー錯覚			錯覚、錯視、錯聴			
8							
9	感覚・知覚(4)ー形や面の知覚			形と面の知覚、まとまりの知覚、知覚の恒常性			
10							
11	パターン認知			遮蔽と補完、鋳型照合モデル、特徴分析モデル、視点非依存アプローチ、視点依存アプローチ			
12							
13	思考(1)ー知識のモデル			回想的ネットワークモデル、活性化拡散モデル、スキーマ理論			
14							
15	思考(2)ー問題解決			収束的思考と発散的思考、創造的思考、発想支援			
16							
17	言語(1)			象徴、記号、言語			
18							
19	言語(2)			言語的コミュニケーション、非言語的コミュニケーション			
20							
21	文章の理解			統語論的处理(変形生成文法)、意味論的处理、語用論的处理、トップダウン処理、ボトムアップ処理			
22							
23	イメージの情報処理			画像的記憶、心的回転、イメージと表象			
24							
25	メタ認知			メタ認知的知識、メタ認知的活動(モニタリング、コントロール)			
26							
27	注意・意識			意識・無意識、変性意識状態、注意の分類、選択的注意、空間的注意、焦点の注意と分割的注意、処理の自動性			
28							
29	まとめ			これまでのまとめと復習			
30							

授業科目名	心理測定法		担当者名	山田嘉明			
			実務経験				
教科書	教科書は指定しない 配付資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
		15					
授業概要	直接的な測定や調査ができない研究対象に対して, データに基づく検証ができるようさまざまな測定法や調査法が開発され, 心理測定法として心理学や関連諸科学の発展に寄与してきた。言語聴覚療法の評価においても, 心理測定法は重要な役割をもっている。ここでは心理測定の方法論やデータ分析方法について学習する。						
学習到達目標	心理学における代表的な測定法について, それらの特徴や意義, 利用法を説明できる。 ・心理物理学的測定法を説明できる。 ・検査の信頼性, 妥当性を説明できる。 ・代表的なデータ解析法について説明できる。						
評価方法	レポート提出(20%), 期末試験(80%)						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	心理測定法とは			尺度の水準, 名義尺度, 順序尺度, 間隔尺度, 比率尺度, 偶然誤差, 恒常誤差について説明できる。			
2							
3	心理物理学的測定法(1)―調整法, 極限法			閾値, 刺激閾, 弁別閾, 主観的等価点, 丁度可知差異, 調整法, 極限法について説明できる。			
4							
5	心理物理学的測定法(2)―恒常法, マグニチュード推定法			恒常法, マグニチュード推定法, および信号検出理論について説明できる。			
6							
7	テスト理論			古典的テスト理論, 項目反応理論, 検査の信頼性と妥当性について説明できる。			
8							
9	尺度構成法, 調査法			尺度構成法, 評定法, 多次元尺度構成法, 質問紙法, 悉皆調査, 標本調査について説明できる。			
10							
11	データ解析法(1)―統計学事始め			記述統計学, 推測統計学, 統計的仮説検定について説明できる。			
12							
13	データ解析法(2)―多変量解析			重回帰分析, 因子分析について説明できる。			
14							
15	データ解析法(3)―共分散構造分析			共分散構造分析について説明できる。			

授業科目名	言語学Ⅱ		担当者名	佐々木 智巳			
			実務経験				
教科書	言語聴覚士のための基礎知識 音声学・言語学」/医学書院 配布資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	言語学の内容、方法論の基礎を学ぶ。1年時に履修した知識に基づき、人間の言語の特質から音韻論、形態論、統語論、意味論などの個別分野についての知識を深め、脳内で言語がどのように処理されているかを概観する。また、データ分析を含めた演習を毎週行うことで、知識の定着と能動的な分析能力の向上を図る。						
学習到達目標	言語理解・算出の基本的な仕組みを理解する。言語一般にみられる特徴と、その具体事例としての日本語の特徴を理解し、発話データを言語学的に分析する能力を習得する。						
評価方法	出席・課題取組・期末試験の結果を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	言語学の基礎①【言語学の誕生】【人間言語と動物言語】			言語学が必要とされる理由を理解できる。人間の言語と動物の言語の共通点と相違点を説明できる。			
2							
3	言語学の基礎②【記号としての言語】【言語の機能】			ソシュールの言語観や言語の機能を理解できる。言語の生産性の基盤となるものを説明できる。			
4							
5	音韻論①【音声と音素】【異音と素性】			音声と音素の違いを説明できる。音素や素性を用いて言語を音韻論的に分析できる。			
6							
7	音韻論②【モーラと音節】【音韻規則】			モーラ(拍)と音節の区別をつけ、正しく数えることができる。音韻規則を用いて音韻現象を説明できる。			
8							
9	形態論①【語と形態素】【形態素の種類】			複数の視点から形態素の分類ができる。形態素を分析できる。			
10							
11	形態論②【語構成】【形態論と音韻論】			形態素境界にかかわる現象を理解し、形態音韻論的に説明できる。			
12							
13	統語論①【語彙範疇と統語構造】【チョムスキー以前の統語論】			文を構成する要素を分析・分類できる。直接構成素分析ができ、その問題点を理解できる。			
14							
15	統語論②【句構造規則】【チョムスキーと生成文法】			句構造規則を理解できる。チョムスキー以前と以後の言語学の特徴を理解できる。			
16							
17	意味論①【語・句の意味】【意味関係】			語や句の意味とは何なのかをりかいてできる。「意味」にどのような分類や関係があるのかを理解し、分析できる。			
18							
19	意味論②【文の意味と語用論】【言語と文化・思考】			文脈とは何かを説明できる。思考と言語の関係性について理解できる。			
20							
21	言語学と周辺分野【言語学の歴史的影響】【言語学と認知科学】			言語学と他の研究分野との関りについて理解できる。認知科学的視点で言語を捉える方法論について理解できる。			
22							
23	言語学的視点での日本語【日本語の歴史】【日本語の特徴】			日本語の歴史を理解できる。様々な視点で日本語の特殊性と普遍性について説明できる。			
24							
25	データ分析演習①【外来語のアクセント】			外来語や新語が日本語の語彙に入った時、アクセントがどのように付与されるかを分析できる。			
26							
27	データ分析演習②【言い間違い】			言い間違いの中にみられる言語現象を、音韻、形態、統語の各方面から分析できる。			
28							
29	データ分析演習③【連濁】			連濁を言語学的に分析することで、日本語の特徴、および、それを理解・算出する日本人の言語能力を総合的に理解できる。			
30							

授業科目名	音声学Ⅱ		担当者名	佐々木 智巳			
			実務経験				
教科書	言語聴覚士のための基礎知識 音声学・言語学／医学書院 配布資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	音声学の考え方とその方法論の基礎を学ぶ。1年時に履修した知識に基づき、人間の音声算出のメカニズムを理解するとともに音声の記述方法を習得する。また、データ分析を含めた演習を毎週行うことで、知識の定着と能動的な分析能力の向上を図る。						
学習到達目標	言語音産出に必要な音声器官の仕組みを理解するとともに国際音声字母の読み書きができるようになる。音声学的分析手法を身につけ、構音の運動生理学的なメカニズムのみならず、脳内での音の処理についても理解する。						
評価方法	出席・課題取組・期末試験の結果を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	音声と音声学 【3種の音声学】 【調音(構音)器官】 【IPA】			音声学の種類、各調音器官の役割、IPA表のメカニズムが理解できる。			
2							
3	単音の産出① 【子音の産出】 【調音位置】 【調音方法】			子音産出のメカニズムが理解でき、説明できる。			
4							
5	単音の産出② 【母音の産出】 【舌の前後・高低】 【唇の丸めの有無】			母音産出のメカニズムが理解でき、説明できる。			
6							
7	音節とモーラ 【音節と聞こえ】 【モーラとリズム】			音節・モーラの各概念とその関連について理解できる。			
8							
9	アクセント① 【ピッチとストレス】 【トーンとアクセント】			言語一般に確認されるアクセント(広義)の分類を理解できる。			
10							
11	アクセント② 【日本語のアクセントタイプ】 【平板・起伏】 【記述法】			日本語のアクセントタイプを理解し、分析ができる。			
12							
13	イントネーション 【句頭・句末のイントネーション】 【イントネーションとアクセント】			イントネーションとは何かを、アクセントとの区別を含めて理解できる。			
14							
15	リズム・ポーズ・速さ 【調整リズム】 【音節リズム】			音声言語に含まれる、アクセントやイントネーション以外の超分節的要素を理解できる。			
16							
17	強調と音声 【強調とは何か】 【強調の種類】			強調の種類を把握し、その実現方法を理解できる。			
18							
19	音声の物理と心理 【音響音声学の初歩】 【カテゴリー的知覚】			音響学の基本的な概念を理解し、現実における言語理解の仕組みを理解する。			
20							
21	音素と音素論① 【音素論/音韻論復習】 【音素】			音素の定義を理解し、音声と音素の違いを理解できる。			
22							
23	音素と音素論② 【音素分析】 【ミニマルペア】 【条件異音・相補分布】			音素分析を行い、音韻規則を用いてその結果を記述することができる。			
24							
25	データ分析・過去問演習① 【音声産出の仕組】 【IPA】			IPAを読み書きして言語データを分析することができる。			
26							
27	データ分析・過去問演習② 【超分節的要素】			音節・モーラやアクセントを総合的に考慮して言語の交替・変化を説明することができる。			
28							
29	データ分析・過去問演習③ 【発話エラーの音声学】			言語習得中、習得後にみられる発話エラーを音声学的に分析し説明することができる。			
30							

授業科目名	聴覚心理学		担当者名	櫻井 潤			
			実務経験	企業等での実務経験あり			
教科書	言語聴覚療法学テキスト 音響・音声学	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		15					
授業概要	「音をどのように聞いているか」についての知識を学ぶ。また、言語聴覚士として「聴こえるしくみ」をどのようにとらえるかを理解する。						
学習到達目標	①聴覚のしくみを理解する。②音の心理的及び物理的側面について理解する。③ラウドネス曲線について理解する。④聴覚の周波数分析とマスキング現象について理解する。⑤両耳の聴こえ方について理解する。⑥聴覚情景分析について理解する。						
評価方法	出席・授業態度・前期試験(9月予定)の結果を総合評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	聴覚の仕組みについて①			聴覚器(耳)の構造を理解する。			
2	聴覚の仕組みについて②			聴覚刺激の伝搬過程を理解する。			
3	音の心理的側面と物理的側面について①			音の3要素について理解する。			
4	音の心理的側面と物理的側面について②			聴覚閾値、痛覚閾値、可聴範囲について理解する。			
5	音の大きさの知覚について①			フォンとゾーンについて理解する。			
6	音の大きさの知覚について②			ラウドネス曲線について理解する。			
7	音の高さの知覚について①			高さ(ピッチ)について理解する。			
8	音の高さの知覚について②			音色について理解する。			
9	音の高さの知覚について③			時間的パターンの知覚について理解する。			
10	聴覚の周波数分析とマスキング現象について①			聴覚フィルタについて理解する。			
11	聴覚の周波数分析とマスキング現象について②			マスキング現象と臨界帯域について理解する。			
12	両耳聴効果について			両耳ラウドネス加算効果と音源定位について理解する。			
13	環境と聴覚について①			音による環境理解と騒音について理解する。			
14	環境と聴覚について②			聴覚疲労と聴覚順応について理解する。			
15	環境と聴覚について③			カクテルパーティー効果、マガーク効果、音韻修復効果について理解する。			

授業科目名	言語聴覚障害学概論Ⅱ		担当者名	萱場 文			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	言語聴覚士テキスト第3版 摂食嚥下障害学第2版 失語症臨床標準テキスト 配布資料	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚士に必要な基礎知識(リハビリテーション概念、関連法規、各論)について幅広く知識を習得できるよう学習する。						
学習到達目標	言語聴覚士に必要な基礎知識(リハビリテーション概念、関連法規、各論)について理解を深め、説明できるようにする。						
評価方法	出席・授業態度・期末試験の結果から総合的に判断します。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	リハビリテーションの概念・ICFを中心に			リハビリテーションの概念をICFの理論で説明できる			
2	医療の倫理(守秘義務・個人情報保護・インフォームドコンセント) 医療安全と感染予防			医療の倫理(守秘義務・個人情報保護・インフォームドコンセント)について説明できる。医療安全と感染予防について説明できる。			
3	失語症各論:失語症の流暢性			失語症の流暢性について説明できる			
4	失語症各論:失語症の病巣			失語症の病巣について説明できる			
5							
6	失語症各論:失語症の言語症状			失語症の言語症状について説明できる			
7							
8	失語症各論:古典型失語症候群			失語症のタイプ分類(古典型失語症候群)について説明できる			
9							
10	失語症各論:非定型失語群			非定型失語群について説明できる			
11	失語症各論:原発進行性失語群			原発進行性失語群について説明できる			
12	失語症各論:純粋型			純粋型について説明できる			
13	摂食嚥下における口腔器官しくみとはたらき			摂食嚥下における口腔器官のしくみとはたらきについて理解し、説明できる			
14							
15	咀嚼時にはたらく筋群			咀嚼時にはたらく筋群について、解剖、そのはたらきについて説明できる			
16							
17	嚥下反射時にはたらく筋群			嚥下反射時にはたらく筋群について、解剖、そのはたらきについて説明できる			
18							
19	摂食嚥下障害の評価			嚥下スクリーニングを中心にその内容、実施法について説明できる			
20							
21	加齢による嚥下障害			加齢による嚥下障害について説明できる			
22							
23	VF・VEについて			VF・VEの実施方法、見方、それぞれの検査法についての違いを説明できる			
24							
25	リハビリテーション診療に関する評価 治療 リスク管理			リハビリテーション診療に関する評価 治療 リスク管理について説明できる			
26							
27	言語聴覚士の業務・連携・職業倫理・リスクマネジメント			言語聴覚士の連携について関連法規をもとに説明できる			
28							
29	まとめ			言語聴覚障害学概論Ⅱ・前期の内容を理解できたか確認する			
30							

授業科目名	言語聴覚障害診断学Ⅰ		担当者名	島田 真須美			
			実務経験	言語聴覚士として診療所等での勤務経験あり			
教科書	標準言語聴覚障害学 言語聴覚療法評価・診断学／医学書院	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚療法における評価・診断の基本的な過程を学ぶ。						
学習到達目標	言語聴覚療法における評価・診断の基本概念、過程について理解できる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	評価・診断の基本概念			評価・診断の基本概念について理解する。			
2							
3	臨床データの解釈			臨床データの解釈について理解する。			
4							
5	評価・診断の過程			評価・診断の過程について理解する。			
6							
7	スクリーニング			スクリーニングについて理解する。			
8							
9	各領域において必要とされる検査①			各領域において必要とされる検査について理解する。			
10							
11	各領域において必要とされる検査②						
12							
13	各領域の評価・診断の実際①			各領域の評価・診断の実際について理解する。			
14							
15	各領域の評価・診断の実際②						
16							
17	各領域の評価・診断の実際③						
18							
19	報告書の書き方①			報告書の書き方について理解する。			
20							
21	報告書の書き方②						
22							
23	情報提供			情報提供について理解する。			
24							
25	言語聴覚障害学における研究			言語聴覚障害学における研究について理解する。			
26							
27	研究の種類			研究の種類について理解する。			
28							
29	論文の読み方			論文の読み方について理解する。			
30							

授業科目名	失語症Ⅱ		担当者名	萱場 文			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	・失語症 臨床標準テキスト ・ぜんぶわかる 脳の事典 ・配布資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必須	講義
		30					
授業概要	各病期(急性期 回復期 生活期)に必要な失語症の評価とリハビリテーションの理論、方法、及び治療計画について学ぶ。失語症者が抱える問題点を捉え、機能的にだけでなく、生活的側面にも視点を向け、社会参加や環境調整を含めたコミュニケーション支援について学習を深める。						
学習到達目標	・各病期(急性期 回復期 生活期)に必要な失語症の評価法とリハビリテーションについて説明できる。 ・生活的側面にも視点を向けた社会参加や環境調整を含めたコミュニケーション支援について種類、内容について説明できる。						
評価方法	出席・授業態度、期末試験から総合的に評価します。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	評価・診断過程(収集する情報の種類)			失語症の評価診断における情報収集の種類が説明できる。			
2	問診・スクリーニング検査①			問診の内容、方法について説明できる。 スクリーニング検査について説明できる。			
3	スクリーニング検査②			失語症のスクリーニング検査について実施できる。			
4	スクリーニング検査③						
5	鑑別診断 カウンセリング 改善の評価			失語症の鑑別診断 カウンセリング 改善の評価について説明できる。			
6	検査施行上の留意点 総合的失語症検査			検査施行上の留意点について説明できる。WAB、SLTAの特徴を理解し、それぞれの違いについて述べることができる。			
7	特定の側面の検査①失語症補助テスト 失語症語彙検査(TLPA)失語症構文検査(STA)			失語症補助テスト 失語症語彙検査(TLPA)、失語症構文検査(STA)の概略について理解し、説明できる。			
8	特定の側面の検査②トークンテスト実用コミュニケーション能力検査(CADL)			トークンテスト実用コミュニケーション能力検査(CADL)の概略について理解し、説明できる。			
9	特定の側面の検査③SALA失語症検査 標準抽象語理解力検査(SCTAW)			SALA失語症検査 標準抽象語理解力検査(SCTAW)の概略について理解し、説明できる。			
10	失語症コミュニケーションの評価 関連する認知機能の評価①(非言語的知能の分析 失行失認の分析 記憶障害の分析)			失語症コミュニケーションの評価について概略を説明できる。失語症に関連する非言語的知能の分析、失行失認の分析、記憶障害の分析の評価について説明できる。			
11	関連する認知機能の評価②(注意障害の分析 遂行機能障害の分析 社会行動障害の分析)			失語症に関連する注意障害の分析、遂行機能障害の分析、社会行動障害の分析の評価について説明できる。			
12	医学的情報の収集 心理社会的側面の情報収集(サマリー)			急性期、回復期のリスクをふまえて、医学的情報の収集の内容、心理社会的側面の情報収集の内容について説明できる。			
13	鑑別、経過と予後、訓練援助の方針の決定			失語症との他疾患の鑑別について述べるができる。経過と予後予測をふまえて、訓練援助の方針の決定について説明できる。			

14	評価・診断のまとめ	評価・診断について理解し、知識を習得できたか確認する。
15	リハビリテーション過程 失語症治療の歴史 多職種連携	リハビリテーションの流れ、多職種連携について概略を述べることができる。失語症治療の歴史について学ぶ。
16	失語症セラピー①(行動変容法 刺激・促進法 機能再編成法)	失語症セラピー、行動変容法 刺激・促進法 機能再編成法について理解し内容を述べるができる
17	失語症セラピー②(遮断除去法 語用論的アプローチ 認知神経心理学的アプローチ 拡大・代替コミュニケーション)	失語症セラピー、遮断除去法、語用論的アプローチ、認知神経心理学的アプローチ、拡大・代替コミュニケーションについて理解し、内容を述べるができる。
18	言語モダリティー別訓練について 言語モダリティー別訓練(言語理解 発話 書字)の促進パターン	言語モダリティー別訓練について説明できる。言語モダリティー別訓練(言語理解 発話 書字)の促進パターンについて理解し、説明することができる。
19	言語モダリティー別訓練課題(聴覚的理解 発話 読字 書字)	言語モダリティー別訓練課題(聴覚的理解 発話 読字 書字)について理解し、説明することができる。
20	語彙・意味の訓練 音韻の訓練	語彙・意味の訓練、音韻の訓練について理解し、説明できる。
21	読字の訓練	読字の訓練について理解し、説明できる。
22	書字の訓練	書字の訓練について理解し、説明できる。
23	文・統語の訓練	文・統語の訓練について理解し、説明できる。
24	重症度別の言語訓練の組み立て	重・中・軽度の失語症の言語訓練の組み立てについて説明できる。
25	可能なコミュニケーション手段と注意事項の周知 失語症のコミュニケーションの有効性増進法(PACE)①	リハビリテーションスタッフや家族に対して、コミュニケーション原則の周知徹底の方法や代替コミュニケーションの具体的指導について説明できる。
26	失語症のコミュニケーションの有効性増進法(PACE)②	失語症のコミュニケーションの有効性増進法について内容を理解し、説明、実施できるようにする。
27	心理・社会的問題への対応	若年層・中年層・高齢層における問題点を踏まえ、心理社会的問題への対応について述べるができる。
28	訓練計画	社会的側面、ニーズ、家族、予後予測など総合的に考えて、訓練計画を立案できるようにする。
29	各期(急性期・回復期・生活期)の訓練・援助	急性期・回復期・生活期の各期での訓練・援助について説明できる。
30	訓練・援助のまとめ	訓練・援助について理解し、知識を習得したか確認する。

授業科目名	高次脳機能障害Ⅱ		担当者名	島田真須美			
			実務経験	言語聴覚士として診療所等での勤務経験あり			
教科書	高次脳機能障害学 第3版 石合純夫 著 医歯薬出版株式会社 2023	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	言語聴覚士が主に関わる失語症は、高次脳機能障害の1つであり、失語症者は他の高次脳機能障害を合併している場合がある。症状理解の一助として高次機能障害の発症機序や症状、対応方法、リハビリテーションについて詳述する。						
学習到達目標	各種の高次機能障害の発症機序や症状、対応方法、リハビリテーションに関する知識を修得する。						
評価方法	出席、授業態度、期末試験から総合的に評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	高次脳機能障害総論			高次脳機能障害の基本概念を理解する			
2							
3	失行と関連症状の評価とリハビリテーション			失行と関連症状の評価とリハビリテーションについて説明できる			
4							
5	行為・動作・行動の障害の対応とリハビリテーション			行為・動作・行動の障害の対応とリハビリテーションについて説明できる			
6							
7	失認と関連症状の対応とリハビリテーション			失認と関連症状の評価とリハビリテーションについて説明できる			
8							
9	空間性障害の評価とリハビリテーション			空間性障害の評価とリハビリテーションについて説明できる			
10							
11	脳梁離断症状(半球離断症候群)の評価とリハビリテーション			脳梁離断症状(半球離断症候群)の評価とリハビリテーションについて説明できる			
12							
13	注意障害の評価とリハビリテーション			注意障害の評価とリハビリテーションについて説明できる			
14							
15	記憶障害の評価とリハビリテーション			記憶障害の評価とリハビリテーションについて説明できる			
16							
17	遂行機能障害の評価とリハビリテーション			遂行機能障害の評価とリハビリテーションについて説明できる			
18							
19	認知症の評価とリハビリテーション①			認知症の評価とリハビリテーションについて説明できる			
20							
21	認知症の評価とリハビリテーション②			認知症の評価とリハビリテーションについて説明できる			
22							
23	原発性進行性失語の評価とリハビリテーション			原発性進行性失語の評価とリハビリテーションについて説明できる			
24							
25	外傷性脳損傷による高次脳機能障害の評価とリハビリテーション			外傷性脳損傷による高次脳機能障害の評価とリハビリテーションについて説明できる			
26							
27	高次脳機能障害の検査			高次脳機能障害の検査について説明できる			
28							
29	高次脳機能障害のリハビリテーションにおける言語聴覚士の役割			高次脳機能障害のリハビリテーションにおける言語聴覚士の役割について説明できる			
30							

授業科目名	言語発達障害Ⅲ		担当者名	熊谷 美緒			
			実務経験	言語聴覚士として療育施設等での勤務経験あり			
教科書	なし	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	小児の評価に必要な検査の実施方法及び、結果の解釈について学ぶ。						
学習到達目標	適切に検査を実施し、結果を解釈できるようになる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	ルリア理論、CHC理論について			ルリア理論、CHC理論について理解し説明できる。			
2							
3	学習認知検査(KABC-Ⅱ①)			KABC-Ⅱの概要、理論的基盤を理解し、説明できる。			
4							
5	学習認知検査(KABC-Ⅱ②)			KABC-Ⅱの認知検査を理解し、実施できる。			
6							
7	学習認知検査(KABC-Ⅱ③)			KABC-Ⅱの習得検査を理解し、実施できる。			
8							
9	学習認知検査(KABC-Ⅱ④)			KABC-Ⅱを採点し、結果を出すことができる。			
10							
11	学習認知検査(KABC-Ⅱ⑤)			KABC-Ⅱの結果を解釈し、支援への活用の仕方を理解し、説明することができる。			
12							
13	知能検査(WISC-V①)			WISC-Vの概要を理解し、説明できる。			
14							
15	知能検査(WISC-V②)			WISC-Vの下位検査(VCI、VSI)を理解し、実施できる。			
16							
17	知能検査(WISC-V③)			WISC-Vの下位検査(FRI、WMI)を理解し、実施できる。			
18							
19	知能検査(WISC-V④)			WISC-Vの下位検査(PSI)を理解し、実施でいる。採点結果からFSIQ及び各合成得点を導き出すことができる。			
20							
21	知能検査(WISC-V⑤)			WISC-Vの結果を解釈し、説明できる。			
22							
23	知能検査(WPSSI-Ⅲ①)			WPPSI-Ⅲの下位検査(VCI、PRI)を理解し、実施できる。			
24							
25	知能検査(WPSSI-Ⅲ②)			WPPSI-Ⅲの下位検査(PSI、GLC)を理解し、実施できる。			
26							
27	知能検査(WPSSI-Ⅲ③)			WPPSI-Ⅲの下位検査の採点結果からFSIQ及び各合成得点を導き出すことができる。			
28							
29	知能検査(WPSSI-Ⅲ④)			WPSSI-Ⅲの結果を解釈し、説明できる。			
30							

授業科目名	言語発達障害Ⅳ		担当者名	熊谷 美緒			
			実務経験	言語聴覚士として療育施設等での勤務経験あり			
教科書	なし	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
		15					
授業概要	小児の評価に必要な検査の実施方法及び、結果の解釈について学ぶ。						
学習到達目標	適切に検査を実施し、結果を解釈できるようになる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	田中ビネー知能検査Ⅴ① 小児①			発達チェック、 1歳級～3歳級の問題を理解し、実施できる。			
2							
3	田中ビネー知能検査Ⅴ② 小児②			4歳級～8歳級の問題を理解し、実施できる。			
4							
5	田中ビネー知能検査Ⅴ③ 小児③			9歳級～13歳級の問題を理解し、実施できる。			
6							
7	田中ビネー知能検査Ⅴ④ 成人			成人級の問題を理解し、実施できる。			
8							
9	田中ビネー知能検査Ⅴ⑤			田中ビネーⅤの結果を解釈し、説明できる。			
10							
11	支援方法①インリアルアプローチ			支援法の基本を理解できる。			
12	支援方法②ABA(応用行動分析)			支援法の基本を理解できる。			
13	支援方法③ペアレントトレーニング			支援法の基本を理解できる。			
14	支援方法④S-S法			支援法の基本を理解できる。			
15	症例検討			症例検討を行う。			

授業科目名	脳性麻痺		担当者名	熊谷美緒			
			実務経験	言語聴覚士として療育施設等での勤務経験あり			
教科書	・小児の摂食嚥下リハビリテーション第2版／医歯薬出版	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
	・イラストでわかる人間発達学／医歯薬出版	時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	講義
		30					
授業概要	脳性麻痺を中心とした運動発達の障害を呈する小児の疾患について理解するために、姿勢や移動、上肢機能等の運動発達を学習する。そのうえで、多種多様な臨床像があることを理解し、ライフステージに応じた対応や多職種でのアプローチの中で言語聴覚士としてすべき支援について学ぶ機会とする。						
学習到達目標	①脳性麻痺の定義、原因、臨床像について理解し、説明できる。 ②定型発達児と脳性麻痺児の発達の違いについて理解し、説明できる。 ③脳性麻痺を中心とした運動発達の障害を呈する臨床像を理解し、評価方法及び支援方法を理解し、説明できる。						
評価方法	試験及び課題提出等から、総合的に判断する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	脳性麻痺とは（定義、原因及び臨床像）			脳性麻痺の定義、原因、臨床像（類型別の特徴等）について理解し、説明できる。			
2							
3	正常発達の基礎知識①（姿勢、移動の発達）			姿勢及び移動の発達について、理解し説明できる。			
4							
5	正常発達の基礎知識②（上肢機能の発達）			上肢機能の発達について、理解し説明できる。			
6							
7	正常発達の基礎知識③（摂食嚥下機能の発達）			摂食嚥下機能の発達について、理解し説明できる。			
8							
9	発達の变化（ライフステージにおける臨床像の変化）			ライフステージごとの臨床像の変化について理解し、説明できる。			
10							
11	かかわり方の基本（対象児の触り方、抱き方等）			実際に脳性麻痺児に関わる際の注意点を理解し、実施できる。			
12							
13	摂食嚥下機能面の評価①			摂食嚥下障害の評価ができる。			
14							
15	摂食嚥下機能面の評価②			摂食嚥下障害の評価ができる。			
16							
17	摂食嚥下機能面の訓練①			摂食嚥下障害の評価ができる。			
18							
19	摂食嚥下機能面の訓練②			摂食嚥下障害に対して行う訓練を理解し、説明できる。			
20							
21	コミュニケーション面の評価①			コミュニケーション面の評価に必要なST的視点を理解できる。			
22							
23	コミュニケーション面の評価②			コミュニケーション面の評価ができる。			
24							
25	地域における発達支援（脳性麻痺の方の実際の生活について）			事例を基に、実際の脳性麻痺の方の生活を理解できる。			
26							
27	重症心身障害児（者）とは（定義、原因及び臨床像）			重症心身障害児（者）の定義、原因及び臨床像を理解し説明できる。			
28							
29	チームアプローチ			関連職種や関連施設について理解し、説明できる。			
30							

授業科目名	運動性構音障害Ⅱ		担当者名	佐々木 貴行			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	・「言語聴覚士のための運動障害性構音障害学」 廣瀬肇他著 医歯薬出版 ・配布資料(プリント)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	運動障害性構音障害Ⅰで学んだ基礎をもとに評価・訓練の視点を深めていく。正常と異常を音声や発話明瞭度、発話自然度を通して判断する力を習得する。また、実習に必要な実践的な視点とアセスメントの基本を学んでいく。						
学習到達目標	運動障害性構音障害をタイプ別に特徴を理解し、基本的な評価・訓練方法を習得し説明できる。 評価方法(AMSDやSLTA-ST)の実践と病態に応じた検査結果について理解できる。						
評価方法	出席、授業態度、レポート、筆記試験を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	運動障害性構音障害Ⅰの復習			前年度の学習の振り返り			
2							
3	音声の仕組みと正常と異常を理解する1			音声の障害と構音障害を区別する			
4							
5	音声の仕組みと正常と異常を理解する2			音声の障害と構音障害を区別し 自分の言葉で説明できる			
6							
7	日本語の構音を理解する1			日本語の構音異常を理解する			
8							
9	日本語の構音を理解する2			構音の歪みを障害として理解し 説明できる			
10							
11	ことばの神経機構を理解する1			正常な構音と異常の違いを理解			
12							
13	ことばの神経機構を理解する2			正常な構音と異常の違いを理解し 自分の言葉で説明できる			
14							
13	運動障害性構音障害のタイプ別の評価・訓練方法の基礎1			タイプ分類毎の評価・訓練方法を理解			
14							
15	運動障害性構音障害のタイプ別の評価・訓練方法の基礎2			タイプ分類毎の評価・訓練方法を理解			
16							
17	運動障害性構音障害のタイプ別の評価・訓練方法の基礎3			タイプ分類毎の評価・訓練方法を理解			
18							
19	運動障害性構音障害のタイプ別の評価・訓練方法の基礎4			タイプ分類毎の評価・訓練方法を理解し 自分の言葉で説明できる			
20							
19	発声発語検査の実践(AMSDとSLTA-ST)1			検査方法の確認と実践			
20							
21	発声発語検査の実践(AMSDとSLTA-ST)2			検査方法の確認と実践			
22							
27	検査結果の分析1			模擬的な症例を通して分析する			
28							
29	検査結果の分析2			模擬的な症例を通して分析する			
30							

授業科目名	器質性構音障害		担当者名	小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	特になし 参考書 言語聴覚療法シリーズ 「器質性構音障害」 (建帛社)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	器質性構音障害の中でも口唇口蓋裂、口腔腫瘍を中心に講義を進めていく。口唇口蓋裂については、出生時から成人にわたって一貫した医療・学校・地域支援における言語聴覚士の役割について解説する。						
学習到達目標	口唇口蓋裂について、口唇・口蓋の発生、発達、成長に伴う変化を解剖、口腔構音機能の評価、リハビリテーション支援まで理解し、実践できるようにする。また、口腔腫瘍については、舌切除・顎欠損を中心に治療方法構音検査・評価、訓練までを顎周する。どちらも多職種連携による支援の継続が不可欠であることを理解し、言語聴覚士としての関わり方を習得する。						
評価方法	定期試験、出席、授業態度によって評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	器質性構音障害と運動性構音障害、器質性構音障害の違い			器質性構音障害の定義を説明できる。			
2				具体的な疾患名を説明できる。			
3	発声発語器官の解剖と生理			口唇と口蓋の発生を説明できる。			
4				鼻咽腔閉鎖機能について説明できる。			
5	口唇口蓋裂の基礎知識			裂型分類について説明できる。			
6				発生頻度について説明できる。			
7	口唇口蓋裂の問題点と治療方針～チームアプローチ			顔面の形態異常、耳鼻咽喉科的問題、歯科的問題、心理的問題について理解する。			
8							
9	口唇裂の治療～手術・口蓋形成術～口蓋瘻孔の閉鎖術			口唇裂の治療、手術法を理解する。			
10				口蓋形成術について説明できる。			
11	口唇口蓋裂の児の言語発達と構音発達の問題			言語発達に問題がある場合、構音の発達にどのような影響を与えるか(グループワーク)			
12							
13	口唇口蓋裂症例にみられる構音障害			構音障害の種類と頻度について理解する。			
14				鼻咽腔閉鎖機能不全について理解する。			
15	口唇口蓋裂への支援の実際1			年齢に応じた設定:①出生時～口蓋形成術前②口蓋形成術後～4歳			
16							
17	口唇口蓋裂への支援の実際2			年齢に応じた設定:③4歳～就学			
18							
19	口唇口蓋裂への支援の実際3			鼻咽腔閉鎖機能の検査と評価			
20							
21	口唇口蓋裂への支援の実際4			異常構音への評価と訓練			
22							
23	口唇口蓋裂への支援の実際5			年齢に応じた設定:④学童期以降の支援～言語聴覚士としての長き支援			
24							
25	口腔腫瘍:舌切除・顎欠損への支援1			口腔腫瘍とその治療について理解する。			
26				構音検査と評価について理解する。			
27	口腔腫瘍:舌切除・顎欠損への支援2			舌切除への構音訓練、補綴物について考えて、さらに摂食嚥下訓練につなげる。			
28							
29	器質性構音障害のまとめと言語聴覚士の継続的支援について			器質性構音障害への継続的な支援についてまとめる(グループワーク)			
30							

授業科目名	機能性構音障害		担当者名	阿部 由香			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	クリア言語聴覚療法5 建帛社 小児発声発語障害 編著 佐藤亜希子 緒方祐子	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	通年	必修	講義
		30					
授業概要	機能性構音障害の概念と理論,方法論について学び,臨床で用いられる検査等の演習も行う。教科書を通して発声発語器官の構造や機能,音韻と構音の発達を確認し,小児で多く見られる機能性構音障害の発話症状を解説する。また,演習では基本的な検査だけでなく,小児と関わるための臨牀的な視点も解説する(グループ演習も実施する)。						
学習到達目標	機能性構音障害の概念, 理論,方法論を理解する。演習において小児の発話特性について学び,実践にむけた情報収集・検査方法等を理解し,修得する。						
評価方法	出席・課題取組・試験(12月)の結果を総合評価						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	小児の発声発語障害に必要な基礎知識 【発声発語の構造機能】【音韻と構音の発達】			発声発語器官を理解し,鼻咽腔閉鎖機能について説明できる。 構音発達と順序性について説明できる。			
2							
3	小児の発声発語障害に必要な基礎知識 【音韻と構音の発達】【音声学的な知識の復習】			音韻認識について理解する。 日本語の音素表記と音声表記の違いが説明できる。			
4							
5	小児の発話障害の原因・要因と発症メカニズム 【小児の発話障害の基本的概念】【機能性構音障害とは】			構音障害の分類について説明できる。 機能性構音障害について説明できる。			
6							
7	発話の症状① 【聴覚判定に基づく誤りの分類】 【発達途上の構音の誤りの内容】			構音の誤りの分類について説明できる。			
8							
9	発話の症状② 【発達途上の構音の誤りの内容】 【特異な構音操作の誤りの種類と症状の特徴】			特異な構音捜査の誤りの分類について説明できる。			
10							
11	発話の症状③ 【特異な構音操作の誤りの種類と症状の特徴】 【語の音の配列の誤りについて】			語の音の配列の誤りについて説明できる。			
12							
13	評価① 【小児の臨床場面でのSTの役割について】 【情報収集の方法や内容について】			小児の臨床場面での情報収集の内容と質問の仕方について説明できる。			
14							
15	評価② 【小児の発話障害の評価に必要な検査の種類や内容】			構音・音韻の検査の実施方法を理解する。			
16							
17	評価③ 【評価のまとめから判定を行い、治療方針の立案について】			評価のまとめから問題点の抽出と治療方針の立案について考える。			
18							
19	評価④ 【評価サマリーの作成の仕方を学ぶ】			評価サマリーを作成する。			
20							
21	訓練・支援① 【言語治療の原則について学ぶ】 【構音訓練の流れについて学ぶ】			構音訓練の流れについて理解する。			
22							
23	訓練・支援② 【系統的構音訓練について学ぶ】			系統的訓練について考える。			
24							
25	訓練・支援③ 【構音障害の特徴から構音訓練の方法について学ぶ】			訓練につまずいたとき,養育者とこどもとSTの連携について考え、理解する。			
26							

27	訓練・支援④	効果的な教材の選択と教材作成ができる。
28	【訓練に使用する効果的な教材の選択について学ぶ】	
29	訓練・支援⑤ 【訓練に使用する効果的な教材の選択について学ぶ】	
30	試験	機能性構音障害に関する試験を実施する。

授業科目名	摂食嚥下障害Ⅱ		担当者名	小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	摂食嚥下障害学 第2版 医学書院	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚学科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	小児から成人・高齢者までの摂食嚥下機能の発達と成熟、加齢に伴う変化を追いながら、健常者の摂食嚥下の機序を学ぶ。そのうえで、摂食嚥下障害を引き起こす病態、嚥下運動を阻害する原因を把握するため、言語聴覚士が行える検査・評価についての知識を身につける。摂食嚥下リハビリテーションのチームアプローチにおけるSTの役割についても学ぶ。						
学習到達目標	・小児から成人までの摂食嚥下のメカニズム、病態を理解する。 ・摂食嚥下障害の検査・評価方法を習得し、問題点を抽出することができる。						
評価方法	出席・授業態度、期末試験から総合的に評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	小児期の摂食嚥下障害			・小児の摂食嚥下障害の概要と原因を学ぶ ・自閉症スペクトラム症と摂食障害について理解し、説明できる			
2							
3	器質性障害に伴う摂食嚥下障害			口唇口蓋裂と摂食嚥下について説明できる			
4							
5	小児の摂食嚥下障害にみられる合併症とリスク管理			呼吸器系の問題と対応を理解する			
6				てんかんと摂食嚥下障害を理解する			
7	小児の摂食嚥下障害の評価1			発達期の嚥下障害の評価の流れ			
8	小児の摂食嚥下障害の評価2			情報収集～機器を使用した評価			
9	非食事場面における口腔器官の観察・評価			口腔器官を観察する視点			
10	食事場面の観察と評価			口腔機能の発達段階を評価できる			
11	情報の統合と計画の立案			評価と情報を統合することができる			
12				援助計画を立案することができる			
13	小児摂食嚥下リハビリテーションの概要			言語聴覚士の役割を理解できる			
14	小児摂食嚥下障害の特性			グループワークで発表する			
15	小児に対する摂食嚥下リハビリテーション			姿勢調整について説明できる			
16							
17	食物形態へのアプローチ			口腔機能発達に合わせた食形態のアプローチと設定の考え方を説明できる。			
18							
19	小児の摂食嚥下機能へのアプローチ			感覚異常性への対応～異常運動パターンに対するアプローチ(オーラルコントロールによる介助方法)について説明できる。			
20							
21	疾患別の摂食嚥下障害への介入1			脳性麻痺への介入効果について再評価を提示できる。脳性麻痺の発達に合わせた援助プログラムを理解し、説明できる。			
22							
23	疾患別の摂食嚥下障害への介入2			筋ジストロフィーへの対応、食物の種類・形態、介助と自力摂取への介入について説明できる。			
24							
25	疾患別の摂食嚥下障害への介入3			ダウン症の特徴を理解し、特性に合わせた支援をできるようにする。			
26							
27	疾患別の摂食嚥下障害への介入4			自閉症スペクトラム症、口唇・口蓋裂への介入のまとめと復習。			
28							
29	小児から成人までの摂食嚥下リハビリテーションのまとめ			これまでの復習と小テストによる知識の確認。			
30							

授業科目名	吃音		担当者名	小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	吃音支援入門/菊池良和 (学苑社)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	吃音についての基礎知識、訓練、指導、支援法を習得し、吃音臨床の場面で不安なく臨むための実践的な学習を取り入れる。小児～高齢者まで広く吃音に対応できる手技・訓練方法を最新の情報をもとに学習する。						
学習到達目標	吃音臨床を専門的に行っている言語聴覚士は少なく、地域から上がってくる小児の吃音相談への対応に苦慮している現状を改善させるためにも、吃音支援の重要性を理解し、各ライフ・ステージにおける訓練法を習得することを目指す。						
評価方法	定期試験の結果、授業態度により評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	吃音とは？その定義と種類について学習する。			喋りにくさ、身体運動との関係を理解する。			
2				吃音は障害なのか？(グループワーク)			
3	吃音の全体像について1			吃音児・者への支援の現状を理解する。			
4				吃音児・者がかかえる苦悩(グループワーク)			
5	吃音の全体像について2			吃音の原因について説明できる。			
6				吃音の自然回復について説明できる。			
7	吃音の症状について1			吃音の主症状を理解する。			
8				連発とは？説明できる。			
9	吃音の症状について2			難発(停止)とは？説明できる。			
10				回避とは？説明できる。			
11	吃音と脳と体の関係			吃音と脳機能の関係について説明できる。			
12				発達性吃音と獲得性吃音の違いを理解する。			
13	クラタリング(早口言語症)と吃音			早口症について理解する。			
14	吃音の歴史			吃音の歴史について説明できる。			
15	ライフ・サイクル上の吃音問題と支援			バンライパーについて(グループワーク)			
16				学校、職場での吃音支援(グループワーク)			
17	吃音検査法と評価			吃音検査法を理解する。			
18				各種評価法を理解する。			
19	吃音頻度を軽減させる方法1			ライフステージ(幼児期・学童期)で考える。			
20				ライフステージ(青年期・成人期)で考える。			
21	吃音頻度を軽減させる方法2			各訓練法の特徴を理解する。			
22				環境調整法について説明できる。			
23	吃音頻度を軽減させる方法3			リッカムプログラムとは？説明できる。			
24				LPの実際について理解する。			
25	吃音頻度を軽減させる方法4			RESTART-DCM、JSTART-DCMの違い			
26				認知行動療法について説明できる。			
27	吃音頻度を軽減させる方法5			PASS理論に基づく訓練を理解する。			
28				メンタルリハーサルについて理解する。			
29	吃音支援における連携			就学前～学校～職場への連携を理解する。			
30	セルフヘルプグループ			吃音の自助サークル等を理解する。			

授業科目名	聴覚障害Ⅱ		担当者名	小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	聴覚障害学(第3版)医学書院	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		2					
		時間数	言語聴覚科	2	前期	必修	講義
		30					
授業概要	2年次の聴覚障害Ⅱでは、主に小児聴覚障害を中心に授業を進める。平衡器の発生・発達～聴覚器の発達、小児聴覚障害のスクリーニング検査法、各種小児聴力検査。小児難聴のリハビリテーションでは、評価～指導・訓練計画の立案、長期・短期目標の設定までを学習する。他に特異的な聴覚障害(視覚聴覚二重障害を含む)への訓練・支援方法を学習する。						
学習到達目標	小児聴覚検査で得られた結果、家族より収集した情報をもとに訓練の長期・短期目標を立案し、指導・訓練・支援をできる。さらに難聴児および療育者の心理的・社会的課題についても説明できるようになること。						
評価方法	定期試験の結果、出席状況、授業態度で総合的に評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	聴覚器・平衡器の発生、発達と解剖の復習			聴覚器と平衡器の解剖、神経機能について理解し、説明できる。			
2							
3	平衡障害(めまい)疾患			末梢前庭疾患によるめまいと中枢神経性めまいの違いを理解し、説明できる。			
4							
5	乳幼児聴力検査1			新生児スクリーニング検査、OAE、ABR、ASSR、質問紙検査法の復習。			
6							
7	乳幼児聴力検査2			BOA、VRA、COR、ピープショウテスト、遊戯聴力検査について理解し、説明できる。			
8							
9	小児難聴のリハビリテーション1(難聴児のリハビリテーションの目的と考え方)			早期発見と早期リハビリテーションの開始～リハビリテーションの流れと構成を理解する。			
10							
11	小児難聴のリハビリテーション2(小児期の発達と難聴の影響)			乳児期から学童期までの難聴の特徴を理解し、説明できる。			
12							
13	小児難聴の評価1			聴覚評価:発達に対応した乳幼児聴力検査の選択、総合的聴覚評価について理解する。			
14							
15	小児難聴の評価2			コミュニケーション発達検査:コミュニケーション行動、コミュニケーション態度の評価。			
16							
17	小児難聴の評価3			聴覚障害と言語発達障害の関係について理解し、説明できる。			
18							
19	小児難聴の指導・支援1			聴覚活用と聴覚学習、リハビリテーションプログラムの立案。			
20							
21	小児難聴の指導・支援2			難聴児の語彙レベル、文レベルでの言語習得の課題について理解し、説明できる。			
22							
23	小児難聴の指導・支援3			乳幼児期～学童期の支援について理解し、説明できる。			
24							
25	小児難聴の指導・支援4			学校教育における指導と課題について理解し、説明できる。			
26							
27	特異的な聴覚障害 視覚聴覚二重障害			支援の方法とコミュニケーション手段の確保について理解し、説明できる。			
28							
29	特異的な聴覚障害 視覚聴覚二重障害			難聴を伴う重複障害を症例から学び、保護者に対する支援を考える。			
30							

授業科目名	聴覚検査法Ⅱ		担当者名	小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として施設等での勤務経験あり			
教科書	聴覚検査の実際 改訂4版 (日本聴覚医学会)	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
	聴覚障害学 第2版 (医歯薬出版)	時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	演習
		30					
授業概要	純音聴力検査に始まり他覚的聴力検査各種について、検査の目的、聴覚経路のどこを診ているのかを学ぶ。乳幼児から成人までの聴覚検査機器の操作方法について説明し、実際に学生同士で模擬検査を実施する。						
学習到達目標	言語聴覚士が行う聴力検査のために必要な知識を学び、検査機器の特性・機能について説明できる。実際に各種聴覚検査機器に触れ、基本的な操作をマスターする。						
評価方法	出席率と授業態度。定期試験で評価する。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	1年次の復習：耳音響放射(OAE、EOAE、DPOAE、SOAE)と聴性誘発反応(蝸電図、聴性脳幹反応、聴性定常反応)			他覚的聴力検査について復習し、説明できる。			
2							
3	乳幼児聴力検査総論			検査の意義と目的、検査の特殊性について理解する。			
4							
5	聴性行動反応聴力検査			音に対する原始反射、その後の成長に伴う聴性反応検査を理解し、実施できる。			
6							
7	条件詮索反応聴力検査(COR)と遊戯聴力検査、語音聴力検査			検査の手順と検査結果の記録まで習得し、実施できる。			
8							
9	小児の他覚的聴力検査のまとめと新生児聴覚スクリーニング検査および乳幼児健康診査			小テストにて知識の確認			
10							
11	機能性難聴の検査			機能性難聴とは何か、心因性難聴の検査、詐聴とその診断について理解する。			
12							
13	後迷路障害の検査			検査方法と評価について説明できる。			
14							
15	耳鳴検査			ピッチ・マッチ検査、ラウドネス・バランス検査について説明できる。			
16							
17	補聴器装用のための検査1			補聴器の構造と種類、適応判定、選択、調整のための検査			
18							
19	補聴器装用のための検査2			不快・快適レベルの検査方法と補聴器適合検査について説明できる。			
20							
21	人工内耳のための検査			成人の場合、小児の場合それぞれについて理解し、説明できる。			
22							
23	純音聴力検査：気導・骨導についての検査を実施			気導・骨導検査を理解し、実施できる。			
24							
25	語音聴力検査を実施			語音聴力検査を理解し、実施できる。			
26							
27	自記オーディオメトリー、閾値上聴力検査を実施			自記オーディオメトリー、閾値上聴力検査を理解し、実施できる。			
28							
29	インピーダンス・オーディオメトリー、耳小骨筋反射検査の実施			インピーダンス・オーディオメータを操作、検査の目的を理解し、実施できる。			
30							

授業科目名	臨床実習Ⅱ		担当者名	熊谷美緒、眞柳みゆき、萱場文、島田真須美、小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士または歯科医師として病院等での勤務経験あり			
教科書	適宜紹介する	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		3					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	実習
		135					
授業概要	病院や福祉施設など実習施設において、言語聴覚士が臨床で実践する検査法を正しく用い、評価するための観察眼を養うことを目的とする。言語聴覚療法、摂食嚥下療法、小児発達支援などの実際に触れ、言語聴覚士のことば使い、態度、身のこなし、基本的スキルを習得する。実習前の校内での実習指導と実習後の個人面談での臨床実習指導者からの評価及び自己評価をもとに、今後の課題と目標を考察し、実習の総括とする。						
学習到達目標	言語聴覚士が行う検査を症例に応じて適切に選択、実施し、総合的な評価ができる。さらに評価内容をまとめ、的確に説明することができる。						
評価方法	実習先指導者による評価50%、実習前後の学内評価（準備・報告書等）50%。						
時数	授 業 内 容						
135時間	〈実習期間〉 1単位45時間　実習期間：1月19日～2月7日						
	〈実習の目的〉 学生が臨床場面に参加しながら言語聴覚療法を経験し、評価を行うことで、技能および考察能力を向上させる。 医療チームの一員として言語聴覚士の仕事の実際を体験すること。						
	〈評価実習の目標〉 (1)適切な検査法を選択し、評価できる。 (2)問題点を抽出し、リハビリテーションの目標を設定できる。 (3)記録・報告を正確にできる。						
	〈実習計画〉 (1)実習施設は言語聴覚士が業務に従事している医療機関、社会福祉施設とする。 (2)実習時間は指導する言語聴覚士の勤務時間に順じ、1日8時間とする。 (3)実習施設での言語聴覚士の臨床場面やカンファレンスなどを見学する。 (4)実習指導者の指導のもと、失語症検査あるいは構音検査などを適宜に実施する。 (5)評価とエビデンスに基づいた訓練目標の設定を行い、その根拠を考察する。 (6)毎日の実習日誌と指導者からの課題を提出し、指導を受ける。 (7)実習期間終了後、実習報告書を提出する。						

授業科目名	言語聴覚障害特論Ⅰ		担当者名	萱場 文／島田真須美／小坂井秀行			
			実務経験	言語聴覚士として病院等での勤務経験あり			
教科書	資料を配布する	単位数	学 科	学年	学期	科目種別	授業方法
		1					
		時間数	言語聴覚科	2	後期	必修	演習
		30					
授業概要	2年生の評価実習に向けて、これまで積み上げてきた各種検査法の知識について、復習と検査法の確認のための授業となる。失語症、高次脳機能障害、言語発達障害、聴覚障害の各分野でのスクリーニング検査～鑑別検査までの再学習を行う。						
学習到達目標	各種検査法、検査機器を適切に使用できるようにする。実習に向けての各自のスキルアップを目標とする。						
評価方法	実技、演習態度より評価を行う。						
時数	授 業 内 容			到達目標・学習課題など			
1	聴覚検査法～自覚的聴覚検査			純音聴力検査(気導・骨導)を適切に実施できる。			
2							
3	聴覚検査法～自覚的聴覚検査			語音聴力検査、SISI検査、自記オーディオメトリーについて説明できる。			
4							
5	聴覚検査法～他覚的聴覚検査			ティンパノメトリー、耳小骨筋反射検査について説明し、検査を実施できる。			
6							
7	認知症スクリーニング検査法についての復習と確認			MMSE、HSD-Rを適切に実施できる。			
8							
9	高次脳機能検査法についての復習と確認			レーブン色彩マトリックス検査、コース立方体組み合わせ検査等について実施できる			
10							
11	高次脳機能検査法についての復習と確認			注意、遂行機能検査について実施できる			
12							
13	構音検査(AMSD)の復習と確認			AMSDを適切に実施できる。			
14							
15	構音検査(AMSD)の復習と確認			AMSDを適切に実施できる。			
16							
17	失語症検査法についての復習と確認			SLTAの検査を適切に実施できる。			
18							
19	失語症検査法についての復習と確認			SLTAの検査を適切に実施できる。			
20							
21	失語症検査法についての復習と確認			SLTAの検査を適切に実施できる。			
22							
23	失語症検査法についての復習と確認			SLTAの検査を適切に実施できる。			
24							
25	失語症検査法についての復習と確認			SLTAの検査を適切に実施できる。			
26							
27	失語症検査法についての復習と確認			SLTAの検査を適切に実施できる。			
28							
29	摂食嚥下障害スクリーニング検査			臨床での摂食嚥下スクリーニング検査を実施し、評価できる。			
30							